
シアワセの赤い糸

粉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シアワセの赤い糸

【Nコード】

N0203A

【作者名】

粉

【あらすじ】

「教室で愛を語り合うカップルの小指を、妖精が赤い糸で結ぶ」――。宏樹の通う中学には、そんなメルヘン過多な言い伝えがある。少しも信じていなかった宏樹だが、ある日クラスメイトの亜美と教室に残っていると、目の前に現れたのは「妖精」を名乗る謎の中年男。その日から宏樹の運命は大きく狂い始める……。

第1話・・・その言い伝え

「赤い糸って信じる？」

彼女は俺にそう聞いた。

彼女といつてもダーリンハニーの意味じゃなく、三人称の方だ。

「……は？」

俺は急な質問にそう答えるしかなかった。

それは放課後の教室。

2人で委員会の仕事のために残っていた時のことだった。

俺、藤原宏樹と、同じクラスの佐倉亜美は、一週間後に行われる文化祭の実行委員である。

自分で言うのもなんだが俺は特に勉強が出来るわけでもなく、先生から絶大な信頼を得ているわけでもない、ごく平凡な生徒だ。そんな俺が、なぜ我らが中学校における年に一度の祭りの実行委員という重要な役職に就いてしまったかという、何のことはない、委員決めのジャンケンで負けたからだ。

当然、全く乗り気ではない。

そんな理由で半ば嫌々就いた仕事にやりがいを見い出せるほど、俺はまだ人間ができていないのだ。

一方、佐倉亜美はというと、勉強も運動も得意な優等生タイプだ。顔もなかなか可愛いのだが、“言いたい事は言う”ハッキリした性格なので、クラスの男子からは少しばかり敬遠されがちだ。

反対に女子からは、男子にもガンガン文句を言ってくれる存在として頼りにされている。

そんな彼女の口から思いがけずにロマンチックな質問がとび出したので、俺の脳みそは一時停止してしまった。

「だから、赤い糸だってば」

机を2個くつつけ向かい合って座ったままの位置で、彼女はもどかしそうに繰り返した。

「赤い糸って……あの小指の？」

ようやく俺から出たまともな言葉に、佐倉は嬉しそうに目を輝かせた。

「そう！ 運命の二人は小指同士が赤い糸で結ばれてるっていう、伝説よ。よく知ってるね、藤原くん。じゃあ、これは知ってる？ うちの学校に、この伝説にまつわる言い伝えがあるって話」

急に何を言い出すんだ。

俺は実行委員になるまであまり佐倉と話すこともなかった。なので急にこんな突拍子もない事を聞かれて、少しまごついた。

「え？ 知らないけど……何だよ、いきなり」

彼女はフツツと笑った後、夢みる目つきで言った。

「あのね、ロマンチックっていうか少女漫画的っていうか……とにかくすごい素敵な言い伝えなのよ」

佐倉の瞳はキラキラと輝き、頬は紅潮し、まるでバックに花でも散らしそうな雰囲気だ。

しかし、ロマンチックだとか少女漫画だとか、どっちにしろ俺には興味のある分野ではなさそうだ。

「ふーん」

俺のイマイチな反応に、彼女は少しつまらなさそうな顔をした。

「ちよつとお。 “ っていう言い伝え？” って聞いてくれないの？」

「はあ？」

「普通さあ、ここまで話したら聞くでしょう！」

「っていつか、結局お前が話したいだけなんだろう」

俺はもう既に呆れ気味だった。

しかし彼女があまりにも期待に満ちた目で見てくるため、俺はし

かたなく

「……どんな言い伝えナンデスカ」

と尋ねた。“言わせられてる感”溢れる棒読みで。

そんな俺とは対照的に佐倉亜美は意気揚々と語り始めた。

「よくぞ聞いてくれましたました藤原くん！ この話は今日の朝、部活の先輩から教えてもらったんだけど、もうあまりにも素敵な話なんで誰かに言いたくでしょうがなかったのよ！」

佐倉はここで一旦息継ぎした。

「友達に話そうかとも思ったんだけど。何かね」

彼女は肩まである髪を揺らしながら続けた。

「誰かに軽々しくペラペラ喋ったら、それほど素敵じゃなくなるよ
うな、価値が薄れるような、そんな気がしたのよ。わかる？ この
気持ち」

「ちつとも」

悪いがそんな繊細な気持ちは全くわからない。

俺があくびまじりに答えるのも気にせず、彼女は目を輝かせながら話し続けた。

「だから、これ話すのは藤原くんが初めてよ。本当は誰にも言わないで自分の胸にしまっとうと思っただけ、やっぱり我慢できなくなっちゃった。お喋りだから、私。それで肝心の言い伝えの内容
容なんだけどね……」

もはや今日の居残り作業である『後夜祭で流すBGM希望曲調査
プリントの集計』はそっちのけだ。

そんな事はおかまいなしに、佐倉は熱っぽく語る。

「本当にロマンチックなの。“文化祭の7日前、恋人同士が放課後の教室で愛を語りあっていると、午後5時55分ちょうどに2人の前に妖精が現れる。そして2人の小指を深紅の糸で結ぶ。そうするとその2人は永遠に一緒にいられる。”んだって！ ねっ、素敵でしょ？」

「さぶっ」

本当に、鳥肌が立つほど、体がかゆくなるほど、少女漫画チックな伝説だ。

俺が腕を掻きむしるのを見て彼女は今度こそムツとした顔になった。

「なによ、その反応！　こんなに素敵な伝説がうちの学校にあるなんて感激じゃない！　これだからガサツな男子は嫌なのよ」

「何だよ、お前が勝手に喋りたがったんだろ！　だいたい今どき教室で愛を語るなんてお寒いカップルいねーよ！」

こうしてしばらく口ゲンカが続いた後、俺はある事に気付いた。

「そういえば、文化祭の7日前って……今日だな。しかもあと少しで5時55分だし」

教室の時計は5時54分辺りをさしている。

「そつよ。だから今頃どこかの教室でロマンチックなカップルが愛を語ってるかも……」

「んなわけあるか。ハッキリ言っただけさいんだよ、その言い伝え」

「何よ、あんたなんかどうせ一生彼女も出来ないわよ」

その時、教室の後ろで突如バーンという何かが爆発するような音がした。

それと同時に赤い煙が部屋中にたちこめ、視界を遮る。

まさか……火事！？

俺はパニックになりかけたが、辺りは煙だらけで、向かいにいるはずの佐倉の姿はおろか自分の手さえ見えなかったので、その場に立ち尽くすしかなかった。

10秒ほどたつと煙も薄くなり始め、視界が戻った。

佐倉の方に顔をやると、彼女は顔面蒼白で教室のある一点を見つめていた。

後ろの隅の、今さっき爆発音がした辺りだ。

不思議に思い、俺もそこを見る。

するとそこには——オヤジ。

まぎれもなく、オヤジ。

どっからどう見ても、オヤジ。

オヤジといっても血のつながった方じゃなく、中年男全般を指す方だ。

そのオヤジは昔のコントや漫画に出てきそうな、“いかにもオヤジ！”といった感じのステテコと腹巻きを身につけ、毛の薄い頭を手でつるつる撫でながら、酔っぱらったような赤ら顔で俺たちのほうを眺めている。

どこかの祭りにでもいそうな普通のオヤジだ。

ただ1つ普通じゃなかったのは、その彼が異常に小さい事だ。

小柄だとか背が低いとか、そういうレベルじゃない。

パツと見、俺の靴と同じくらいの大きさだから体長26・7センチってどこか。

「……ありえない」

佐倉がポツリと呟いた。俺が何か言おうとした瞬間、オヤジが唐突に口を開いた。

「やあやあ、若さ溢れる少年。そして可愛らしいお嬢さん」

やっぱり普通の、酔っぱらいっぽいダミ声だ。

「そんなに脅えないでくれたまえ。私は決して怪しいものではない」
怪しい奴が決まって言うセリフだ。

それにしても、いやに紳士的な口調だ。

その服装にはとてもじゃないけどふさわしくない。

「……何なのよあんた」

佐倉が震える声で、ただし強気に言った。すごい度胸だ。

俺はさっきから喋る小人才ヤジにあっけにとられて、言葉が出てこない。佐倉はさらに続ける。

「その腹巻き、今どきそんなのコントでも使わないわよ……。あな
たいつの時代の人？」

「いやいや、そこかよ」

ようやく俺も発言した。

「普通この状況だったら、もっと違う事聞くだろ。例えば……何で
そんなに小さいんですか、とか」

オヤジは俺と佐倉の質問、両方に答えた。もちろん、あくまで紳
士的に。

「この腹巻きは昔からの愛用品でね。なにしろ私は冷え症なので、
これがないとられないのだよ。それから、もう1つの質問だが……
何故私がこれほど小さいか。答えは素晴らしく簡単だ。私は、人
間ではないからさ」

人間じゃないと聞いて、佐倉が少し後さずった。

しかし、俺はこの時点でなんとなくわかっていた。

オヤジの正体が。

ほんの数分前に佐倉から聞いた、あの体がかゆくなるような話が、
頭をちらついていたからだ。

自分の予想が外れていてほしい、と心の中で激しく祈りながらも、
俺はおずおずと尋ねた。

「もしかして……赤い系の妖精？」

「ご名答。君はなかなか賢いな、少年」

彼は楽しそうに答えた。

自分で質問しておきながら、俺はオヤジの返答に仰天してしまっ
た。

まさか、本当に妖精なんて生き物が存在するなんて！ しかも、
こんなに『妖精らしくない姿』で。

もっとも俺は今までに実際の妖精なんて見たこともなかったが、
童話か何かにあるように、綺麗な羽の生えた小さな少女を想像して
いた。

でも目の前にいるのは、髪の薄い50代くらいのオッサンだ。想像とは恐ろしいほどかけはなれている。

しかしよく見ると、彼はさっきから笑顔を絶やしていないし、紳士的な口調も不思議と『妖精っぽく』感じてきた。禿げた頭やたるんだ腹も、なんとなくあいきようがある。

妖精とめぐり会えるなんてめったにない機会に、俺は感動していた。

しかし世の中にはそう簡単に信じようとしない人間もいる。例えば、今、俺の隣にいる女子とか。

「ちよつと待つてよ！ あんなにロマンチックな伝説の妖精が、こんなおじさんだなんて……簡単に信じられないわよ！」

“俺の隣にいる女子”こと佐倉亜美は、泣きそうな声で言った。彼女の場合、妖精はいるものと信じていたので、それと出会ったことよりも、自分の懂れていた言い伝えの妖精があまりにも『非・ロマンチック』な姿で登場した事がショックらしい。

その後、これはきつとよくできたロボットでどこかにスイッチがあるのよと呟き、オヤジをひっくり返そうとするのを俺が全力で止め、彼女はようやく落ち着いた。

その間もずっと、オヤジ（もとい、妖精）はニコニコと笑っていた。

楽しそうに、俺と佐倉のやりとりを眺めている。

「君たちは本当に仲が良いな」

「良くない!!」

俺と佐倉が同時に叫ぶ。妖精はそんなこと気にする様子もない。

「まあまあ。そちらのお嬢さんはさっき、私が妖精だなんて信じられないと言っていたが、君たちの小指の『それ』を見れば私が本物の妖精だとわかるだろう」

「え……?」

俺たちは慌てて自分の小指を見る。

最初、『それ』はよく見えなかった。

あまりにも細すぎたから。

しかし、目をこらすと左手の小指に『それ』の姿がハッキリと見えた。

「なんで!？」

俺と佐倉がまた同時に叫んだ。

『それ』とはもちろん、赤い糸だ。

第2話・・・ずっと一緒」

俺と佐倉は、2メートル程の赤い糸で、小指同士を結ばれていた。

「な…… なっ何で!？」

佐倉が悲鳴に近い声で叫んだ。

「わかんねえよ!」

俺も青ざめながら小指の赤い糸をほどこうとする。

しかし、どんなに必死になって手を動かしても結び目は全くとけない。

「喜んでもらえたかい? これで君たちはずっと一緒だ」

オヤジ妖精が、何とも爽やかな笑顔で言った。

「何だよコレ!!」

俺がつめよると彼は少し驚いた顔をする。

「何って… 見ての通り、赤い糸さ。君たちもあの伝説は知っているだろう。 “文化祭の7日前、恋人同士が放課後の教室で愛を” ……」

「じゃなくて!」

俺は長々と喋り出しそんな妖精をさえぎった。

「何でその赤い糸が、俺と佐倉の小指に結んであるんだよ!？」

俺の質問に、妖精は当たり前のように答える。

「だって、君たちは恋人同士なんだろう?」

……は?

「な…… っ何でそうなるのよ!!」

今まで涙目で俺と妖精のやりとりを見ていた佐倉が急にすっとなきょうな声を上げた。驚きと怒りが混じったような表情だ。

もちろん俺も同じ気持ちだった。一体どこをどう見たら、俺と、このやたらと気の強い女子が恋人同士に見えるのか。

「だって、放課後の教室に2人つきりで向かい合って座っているなんて、見るからに恋人同士だろう。それに、遠くからずっと見させ

てもらっていたが、そちらのお嬢さんは何やら嬉しそうな目つきで語っていたし……」

「委員会の仕事で残ってただけよ！ 嬉しそうだったのは、ロマンチックな赤い系の言い伝えを話してたからよ！」

“ロマンチック”の部分にたつぷり皮肉を込めた言い方だ。

どうやら遠くから見ていた妖精には、俺たちの赤い系についての会話まで聞こえなかったようだ。

「そうなのか……私はてつきり、2人が愛の未来予想図についても語り合っているのかと……」

「誰がそんなもん語り合うか！」

またもや俺と佐倉の絶叫が八モる。

ここにきて、妖精から初めて笑顔が消えた。あせりと困惑の表情が浮かぶ。

「それでは……君たちは恋人同士ではないのか？」

声もかすかに震えている。

「全く。全然。100%違います。」

俺が力を込めて否定し佐倉もコクコクと頷くと、妖精は今度こそ顔色を変えた。

「そ……そんな……私は何という間違いを……」

うなるようにそう呟くと、彼はうつむいてそれきり黙ってしまった。

「あの……間違いつて、どういうこと？」

佐倉がおそろおそろ尋ねると、妖精はうつむいたまま答えた。

「私は君たちを恋人同士だと勘違いしていた。てつきり、赤い系の言い伝えを信じて試してきたカップルだと思っていたんだ。だから、赤い系の妖精である私は、君たちの小指を糸で結んだ。しかし……」

ここで俺たちの顔をちらりと見て、

「君たちは恋人同士ではない、ただのクラスメイトだった。赤い糸を君たちに結ぶべきではなかったんだ。」

悲しそうに言った。

「そうね。私もそう思うわ。だから、この糸をほどこしてくれないかしら？ 妖精さん」

自らを責める妖精を見て気の毒に思ったらしく、佐倉は優しく語りかけるような口調になった。

俺も、だんだん妖精がかわいそうになってきた。そんなに自分を責めなくても、糸をほどこしてくれば俺も佐倉も笑顔で許すのに。

しかし、妖精はますます悲しそうに頭を下げ、小さな体を更に小さくした。

そして、信じられない事実を告げる。

「実は……ほどこないんだ」

「……へ？」

「赤い糸は、一度結ぶとほどこないんだ」

俺たちは固まった。

「ほつ、ほどこないってどういうことだよ！？」

驚きのあまり声が裏返ってしまう。

「赤い糸は一度結ぶと、結んだ妖精本人である私にもほどこない。だから、本当に愛し合っていて二度と離れないと誓っているカップルにしか結んではいけないことになっているんだ」

「ちよ、ちよっと待って」

佐倉が急に割って入った。

「赤い糸の言い伝えは“妖精が恋人同士の小指に結ぶと、その2人はずっと一緒にいられる”って内容でしょ？ この“ずっと一緒”っていうのは、もちろん距離的に体が離れないって意味じゃなくて、恋人同士がケンカとか浮気とかしないですべて仲良しって意味よね。恋人同士でもなんでもない私と藤原くんの場合は、“ずっと一緒”ってどういうことになるのかしら？」

「君も賢いお嬢さんだな」

妖精は弱々しく微笑んだ。

「そう。 “ずっと一緒” はもちろん身体の距離的な問題ではない。

気持ちがずっと一緒ということだ。しかし恋人同士ではない君たちの場合は、もともと気持ちが一緒なわけではない。なので……」
聞くのが恐い。

「一生、お互い違う人とは結婚できなくなる」

「ええっ!?」

この妖精の言葉には俺も佐倉も大絶叫だった。

「そんなぁ! 私小さい頃から花嫁さんが将来の夢だったのに……。
こんなのって、あんまりよ。酷すぎるわ」

佐倉がポロポロと涙をこぼす。

俺もかなりの衝撃を受けた。結婚なんて中2の俺にはまだまだ遠い問題だったけど、一生無理となるとやっぱりショックだ。

そんな俺たちを見て妖精がなだめるように言った。

「そんなに悲観しないでくれたまえ。実はまだ希望が全くないというわけではないんだ」

「えっ!?!」

俺たちは妖精にとびつかんばかりの勢いで反応した。

特に佐倉は自分の夢がかかっているだけに鬼気せまる表情だ。

「どういうこと説明してよ希望があるって何よ何何何!!」

「わ、わかったから、揺さぶらないでくれたまえ。お嬢さん」

彼はコホンと咳払いした後、ゆっくりと語り始めた。

「今から30年ほど前のことなんだが……当時も私は赤い系の妖精としてこの学校にいた。そして、今と同じような愚かな間違いをおかしてしまった。そう、君たちのようにただのクラスメイトだった少年と少女を、カップルと勘違いし赤い糸で結んでしまったのだ」
「……つまりあんた2回目なのかよ」

俺が少し呆れて言うのと、妖精は恥ずかしそうに顔を赤くしたが、佐倉の「いいから、続けて」という言葉を聞くと話を再開した。

「うむ。それでだな、その時もかなりあせったのだが当の2人は落ち着いたもので、『なっってしまったものは仕方がない。このまま赤

い糸で結ばれたまま生きていきますよ』とのんびり笑って言ってくれたんだ」

「そりやまた、すげえ寛大な2人だな」

心底感心してしまった。俺たちの動揺っぷりとは比べものにならない。

「ああ。そしてそれから7日後、つまり文化祭当日だな。後夜祭が終わった後に2人が教室へやって来て、私のことを呼んだ。そこで私が姿を現すと、2人がニコニコしながら立っていた。私がわけを聞くと、何と赤い糸がほどけたと言うではないか。そんなはずはないとビツクリして2人の小指を見ると、本当に糸がほどけていたんだ」

「マジで！？ すげえじゃん！ で、その2人はどうやって糸をほどいたんだ？」

「それなんだが、その2人に聞いても、『特別なことはしていない。気が付いたら糸がなくなっていた』と言うんだ。つまり、なんで糸がほどけたのかは、未だに不明なのだよ」

「なるほどね」

佐倉の瞳がまたキラキラし始める。

「つてことは、その糸がほどけた理由をつきとめれば私たちの糸もほどくことができるかもしれないのね？」

妖精はこっくりと頷いた。それを見て佐倉はますます声を弾ませる。

「わかったわ。諦めるのはまだ早いってことね！ 私たちで出来る限りのことをしてみましよう、藤原くん」

「出来る限りのことって？」

「そうね、例えば……昔からここにいる先生に、言い伝えについて何か知ってるか聞いてみるとか。さすがに30年も前からいる先生はいないと思うけど、古い先生なら何か知ってるかもしれないですよ？ ああ、それとこの学校の卒業生で近所に住んでる人に話を聞いてみるのもいいかもね。案外その30年前の張本人2人が、ここ

ら辺に住んだりするかもしれないわよ」

「そんなに上手くいくかあ？ ……でも、うん、やらないよりは何かやってみたほうが可能性があるもんな。よし、出来る限り、頑張ってみよう」

そうこなくっちゃ、と佐倉はニツコリ笑った。

さっきまで泣いていたのに、本当に浮き沈みの激しい奴だ。

そんな俺たちを見て、妖精が久々に微笑みながら言った。

「ポジティブな2人だな。30年前の2人の寛大さもたいそうなものだったしが、君たちもかなり素晴らしいぞ」

「そう？」

俺たちは何となく顔を見合わせて笑ってしまった。

今気が付いたけど、俺は今日の放課後、佐倉と初めて朗らかに笑った気がする。

第3話・・・悪かったな。」

教室の時計を見ると、もう6時になっていた。

夕焼けの朱色だった窓の外も、闇の色に染まり始めている。

「……そろそろ下校時間ね。帰らなきゃ」

「だな」

しかし俺と佐倉の頭の中には、同じ疑問が浮かんでいた。

2メートル程しかない糸に結ばれたままなのに、お互いの家に帰れるのか？ というものだ。

ところが、ハラハラしながら妖精に質問すると、

「ああ、その事なら心配いらないさ」

とウインク交じりに返されてしまった。

「心配ないってどういう事？」

佐倉が不思議そうに、でも少し安心したように尋ねると、妖精はあっさりと答えた。

「赤い糸は伸びるのだよ。それこそ、何キロメートルでも。おまけに他人からは全く見えないし、君たち2人以外が糸に触れる事もできない。誰かが糸の間を通ろうとしたら、まるでそこには何もなかったかのように簡単にすり抜けられる」

「へー。部外者には気付かれないって事か。ファンタジーにはよくある設定だな」

なんだか、俺も佐倉ももうあまり驚かなかった。妖精やら赤い糸やら、今日1日で色々な衝撃を突き付けられて、今さら発覚した糸の性質には驚くというよりむしろ便利だなあ、と感心してしまう。

「それじゃあ今日はとりあえず帰りましょう。藤原くん、明日から早速その“30年前の2人”を探し始めましょうか！」

「何かお前ちよつと楽しんでない？」

俺の質問を完全無視した佐倉は、改めて妖精に向き直り、腰を屈

めて視線を合わせる。

そして、につこり笑いながら言った。

「妖精さん、私たち必ず糸をほどく方法を見つけます。だから、そんなに自分を責めないで。ね？」

気のせいかな、妖精の目が少しうるんでいる。

「……ありがとう、お嬢さん。私も出来る限り協力したいのだが、30年も前の事なので記憶が曖昧で……。例の2人の名前すら思い出せないんだ。本当に申し訳ない」

「いいのよ。私たちそんな事全然気にしてないから。ね、藤原くん？」

急に話題を振られて一瞬戸惑ったが、俺もこのあいきょうたつぷりの妖精に精一杯の言葉をかける。

「うん。あんたが少し抜けてる事なんか、もうとくに慣れてるよ。今さら気にしないって」

俺としては親愛を込めて言ったつもりなのだが、“抜けてる”という部分で佐倉にみぞおちを小突かれてしまった。

もうこれ以上妖精を落ち込ませるな、という事か。

咳込みながら、慌てて言い直す。

「ぐつ。ごほ。……ええ、と、とにかく俺も佐倉も気にしてないからさ。な？」

妖精は本当に嬉しそうに笑った。

「ありがとう。私も、何か思い出せるように努力してみるつもりだ。本当なら君たちと共に30年前の2人を探したいのだが、何しろ私は妖精という身で、この教室から1歩も外に出られない」

「へえ、そういう決まりがあんのか。でも、俺たちがその分まで頑張って探すからさ、安心して教室で待っていてくれよ」

妖精はコツクリ頷いた後、

「今日と同じ時間にこの教室で私の事を呼んでくれれば、私は現れる事が出来る。もし私が必要になった時は呼んでくれたまえ」

と言いつつ赤い煙と共に消えていった。

俺たちはしばらく教室でぼんやりしていたが、やがて

「……帰ろっか」

という佐倉の言葉をきっかけに教室を出た。

もう時間が遅いせいか、校内はしんと静まりかえり誰も残っていない様子はない。

「何か……すげー1日だったな」

廊下を歩きながら俺は溜め息交じりに呟いた。

「うん。確かに赤い糸の伝説は信じてたけど、まさか本当にあんな事が起きるなんて……」

「とにかく早くコレをどうにかしないと」

俺は、自分の運命を狂わせつつあるうらめしい小指の糸を睨みつける。

「そうね。とりあえず明日、赤い糸とか30年前の2人について何か知ってる人がいないかどうか、学校中で聞き回ってみましょう」

その後はしばらくお互い無言だった。俺も佐倉も、放課後の、ほんの短い時間に起きた色々な出来事で疲れきっていた。佐倉なんか、下駄箱へ向かう途中の段差で一度転びかけたほどだ。

2人してのろのろと靴を履き替えながら、佐倉がポツリと言った。
「どうせ結ばれるんなら、高梨くんがよかったなあ……」

それはほとんど無意識な、独り言に近い言葉だった。しかし幸か不幸か、俺の耳にはしっかりと届いていた。

「高梨い？ 誰だっけそれ」

佐倉は夢見がちなぼんやりした眼から、また普段の、少なくとも俺が知っている『佐倉の眼』に戻った。

「知らないの？ 4組の子よ」

「4組？ ……ああ、あの学級委員の！ 色白のもやしっ子か！」

あまり脳細胞が多いとは言えない俺の頭は、隣のクラスの学級委員で色素が薄い彼の映像をようやく思い出した。と同時に、女子が繰り出したとは思えない強烈な鉄拳を食らい、ますます脳細胞を減らす事になった。

「いつてえな！ 叩く事ないだろ！ しかも頭を」

「もやしっ子なんて言わないでよ！ 彼、肌が人一倍キレイなのよ。サッカー部で活躍してて、筋肉だってちゃんとあるわ。……それに」

彼女は少しうつむいた後、機械的な声（あるいは、機械的なフリをしているような声）で言った。

「……優しいし、すごくモテる。」

「へーえ」

確かに高梨は、女子が騒ぎ出しそうな、あげくの果てには密かにファンクラブまで結成されそうな、美少年的顔立ちだ。何というか、こっ、白馬に乗って登場しそうな。

「それでお前はその高梨のことが好きなんだ？」

「好きっていうか……憧れっていうか……。ねえ、藤原くんにも好きな子ぐらいいるでしょ？ わかるでしょ？ この気持ち」

「いや全く」

恥ずかしながら俺の初恋は、小学校2年生の時。隣の席のショートヘアで可愛い女の子だった。しかしある日その子が、図工の時間に俺が作った粘土人形を「何の動物かわからない」とコメントしたのがきっかけで気持ちは急速に薄れていったっけ。

言わなかったけどあれは動物じゃなく、密かに彼女をモデルにしていたのだ。

それ以来俺は、もう顔で女性を選ぶのはやめよう、と心に誓ったのだった。そして悲しい事にその時から好きな女の子ができた事はない。

俺が懐かしい初恋の思い出に浸っているにもかかわらず、佐倉は隣でまだ恋だとか憧れたとかのやかましい演説の真っ最中だった。大きな瞳をパチパチさせながら、しきりに語っている。まさに彼女

こそ『女は顔じゃない』の教訓を俺に再確認させてくれた。確かに顔のほうはまだまあかもしれないが、その性格ときたら、やたら気が強くてとてもじゃないけど可愛くない。

「ねえ聞いてるの？　つまりね、私の高梨くんに対する気持ちはまだ微妙で、好きかもしれないけど憧れかもしれないっていうか、ただの同級生としての気持ち以上っていうか……。でも顔は本当にかっこいいと思うわ、確かに」

「ふーん。なんだかんだ偉そうな事言っただけで結局お前も顔で選ぶんだなあ。やめとけよ、顔だけで選ぶとろくな事ないぞ」

俺がにやにやしながら言うと、佐倉は少しムツとしたようだった。「そんな事ないわよ。……そりゃあ顔も少しはあるかもしれないけど、高梨くんですごく女子に優しいのよ。この前なんか私が廊下で運んでた重い荷物、スツと持ってくれたわ」

「うわ、何だそりゃ。絶対何か裏があるぜ。そんなに優しい奴に限って実は性格悪かったりさ」

ついに佐倉が爆発した。

「少なくともここにいる誰かさんよりは、ずうっと優しいわよ！！」
売り言葉に買い言葉。またもやケンカが勃発した。

「つまりお前は高梨と赤い糸で結ばれてイチヤイチヤベタベタしたかったんだろ！　悪かったな、優しくも色白でもない俺とで！」

「そうよ、誰があんたみたいなガサツな男子と！」

「でもな俺だつてもっと性格のいい女の子にはそれなりに優しくするよ！　お前にも問題があんだよ！」

それを聞いた彼女は言い表しようのない形相で俺を睨んだ後、足早に校門の向こうへ去って行ってしまった。

1人取り残された俺はしばらくイライラしながら立ち尽くしていたが、やがて軽いため息をつき昇降口を出る。

今からケンカしていてもしょうがない。佐倉とは、糸がほどけるまで色々と協力しなくてはならないのだから。

彼女が去っていった方向へは、妖精が言っていたとおり赤い糸が長く伸びている。これは距離の心配をしなくていい分、糸をたどっていけば自分のいる場所が相手にすぐわかってしまうという事だ。もつとも、俺たちがお互いの居場所を探す事なんかないと思うけれど。

そんな事を考えながら、俺は家路を急いだ。

「ただいまー……」

家に着くと、リビングでくつろいでいた姉貴がすかさず俺を突っついてきた。

「遅かったじゃん宏樹い。さては彼女でもできた？」

「はあ？ んなわけねーだろ」

俺が言い返すと姉貴は大袈裟に顔をしかめる。

「かわいくないなあ、もう。弟のくせに」

俺より4つ年上の姉貴は県でそこその高校に通い、そこそこのいい彼氏とそれなりに順調らしい。暇さえあれば俺に、彼女をつくれだの好きな子はいるかだの色々言ってくる。

少なくとも俺なんかよりずっと恋愛経験豊富な我が姉に、思い切って質問してみる事にした。

「なあ。やっぱり男って優しくなくちゃ駄目なのかなあ」

「急にどうしたの宏樹」

「いや、別に……」

姉貴は、高校に入ってからますます細くなった眉を寄せて、俺の顔を見た。

「そうねえ。やっぱり冷たい男よりは優しい人の方がいいな。でも、あんまり優しすぎても気持ち悪い。ほどほどが1番って事よ」

「ふうん。じゃあ色白で白馬に乗った王子様タイプは？」

「うあゝ、あたしはそういう男、駄目。やっぱり少しワイルドで男らしい人じゃなくちゃ。でもなんにしる顔は重要ね」

「やっぱり顔かよ」

さっきの佐倉とのケンカの内容が頭をかすめる。

そういえば俺は今日2回もあいつにガサツと言われた気がする。

抑えた怒りがまたふつふつと込み上げてきた。

黙り込む俺を見て姉貴は、

「あんたも早く彼女をつくることね」

とにやにやしながら言った。

彼女どころか結婚もできないかもしれないなんて、とてもじゃないけど言えない。というか、言っても信じてもらえないだろう。でももしかしたら何か情報が得られるかもしれないと思い、俺の通う中学の卒業生でもある姉貴に今度は赤い系について聞いてみた。

「姉貴が中学にいた時、赤い系の言い伝えとか聞いたことある？」

「ああ、あの文化祭とか妖精がどうのこうのっていう内容でしょ。知ってる人は結構いたけど、信じてる人はいなかったなあ」

「……やっぱり今どきこんな言い伝え信じる奴あいつくらいしかないよな……」

「あいつって？」

「い、いや何でもない」

結局、これといった情報はなかった。

その後、夕飯を食う時も歯を磨く時も、左手の小指に結びついた赤い糸が気になっていやに動きがギクシャクしてしまった。周りの人には糸が見えないと頭ではわかっていても、どうも落ち着かない。そんなわけで夜11時過ぎに布団に入る頃には、学校を出た時より何倍も疲れてしまい精神的にくったりしていた。すぐにまぶたが重くなってきたが、頭の片隅でまたあの口ゲンカがちらついていた。

佐倉の声が頭で響く。

『どうせ結ばれるんなら、高梨くんとがよかったなあ……』

『誰があんたみたいなガサツな男子と！』

「悪かったな、優しくも色白でもない俺とで。」

またむかつ腹が立ってきた。

俺はあの時と同じ台詞を呟くと、すぐに眠りについた。

第4話・・・少年は苦悩す』

翌朝、目が覚めた俺は天井を見つめながらしばらく布団の中でポロポロとしていた。

——おかしい夢をみてしまった。同じクラスの佐倉亜美と、変な糸で小指同士を結ばれる夢だ。佐倉なんてろくに会話したこともないのに、どうして夢に出てきたんだろう？ おまけに怪しい妖精まで登場して本当にありえない夢だった。学校へ行ったら、友達に話して一緒に笑いとばそう——。

……いや、夢じゃない。

左手の小指を見ると、赤い糸がしっかりと結びついている。昨日の放課後妖精に間違っただけで結ばれたそれは、窓から射し込む朝日を浴びて、憎らしいほどキラキラと綺麗に輝いている。

「やっぱり夢じゃなかったんだなあ……」

思わず呟くと、急に現実に戻されたような気になった。慌てて時計を見ると、もう8時だ。

やばい。かなり、やばい。このままだと遅刻決定だ。

急いで布団から出ると、通常の2倍の速さで、着替え・洗顔・歯磨き・朝食など朝の行事を済まし、挨拶もそこそこに家を飛び出した。

全速力で走った甲斐あって何とか予鈴前には教室に滑り込んだが、朝からこの運動量ではさすがにキツすぎる。俺は既に虫の息で自分の机に突っ伏していた。

「おーす宏樹。何ぐったりしてんだよ。大丈夫か？」

あまりの俺のヘトヘトぶりに友達の松本が声をかけてきた。

「ちょ、ちょっと朝から全力疾走しちゃってさ……」

「何だよそれくらいで情けないな。陸部がそんなにいいのか？」

「陸部だろーが疲れるもんは疲れんだよ」

そう、おれは一応陸上部に所属している。昨日の放課後は居残り作業（プラス赤い糸騒動）のせいで部活に行けなかったが、毎日の放課後はだいたい部活の予定で埋まっている。

ここで松本は急に声のトーンを落として話題を変えた。

「そういえばお前さ、昨日文化祭委員の仕事で放課後残ったんだろ？ 佐倉と2人で。」

「あー…うん」

途中からは3人だったけどな、と心の隅で呟く。

俺と佐倉の小指同士は相変わらず赤い糸で結ばれていたが、昨日妖精が言っていたようにクラスの誰も糸には気付かない。糸があっても、皆はまるでそこには空気しかないように普通に通っている。それでももちろんこの松本も、赤い糸の存在なんかには気付きもせず話し続ける。

「で、どうだった？」

「は？ 何が」

俺がわけもわからず聞き返すと、松本は教室後方の女子軍団の輪の中にいる佐倉亜美に少し視線を向け、

「だからさ、2人つきりだったんだろ？ っていうこと喋ったんだよ」
にやにやしながら言ってきた。今にもヒューヒューとか口笛を吹きだしそうだ。お似合いなお二人さんを囁し立てる時のあの古いノリで。

「松本お前、面白がつてるだろ…」

「まーな。」

この後も数分間、俺は松本に『2人つきり』ネタでからかわれ、ついには男子中学生定番のプロレスごっこにまで発展した。俺が松本に何だか名前のよくわからない技を決め松本がしきりにギブギブ言っていた時に、教室のドアが開いて先生が入ってきたので、ここで遊びは中断された。

その時、佐倉と目が合った。

『バツカじゃないの』。

彼女の目つきは明らかにそう語っていた。まだ昨日のケンカを根に持っているのだろうか。俺も負けじと睨み返す。

「文化祭実行委員……佐倉、藤原！」

急に先生に呼ばれた。

「は、はい」

俺と佐倉は慌ててガタガタと派手に音をたてながらその場で立ち上がる。

「昨日の放課後に残ってやってもらった集計の結果を、今ここで皆に報告してくれ」

先生のこの言葉に、俺は頭から氷水をぶっかけられたような思いがした。

そう、すっかり忘れていたがそもそも昨日の放課後わざわざ教室に居残りしたのは、文化祭実行委員として命じられた『後夜祭で流すBGM希望曲調査プリントの集計』という仕事を終わらせるのが目的だった。しかし途中からそんな作業はそっちのけになっていたので、当然、集計作業は半分も終わっていない。

どうしよう。正直に、終わらなかつたと言っべきか？ でもそうすれば多分理由を聞かれるだろう。

「実は俺たちオヤジっぽい妖精に赤い糸で結ばれちゃってこのままだとお互い以外とは一生結婚できないんです！。先生、どうしたらいいでしょうか？」なんて言ったらどうなるだろう。想像するとちよつと笑えたが、もちろんそんなこと言えるわけがない。

少し焦りながら『どうする？』という相談の意味を込めて佐倉のほうを見た。ところが彼女は落ち着いたもので、自分の鞆から何枚かの紙を取り出した。そして、いつも通りの声で読み上げる。

「皆に書いてもらった希望曲アンケートの集計結果を報告します」
そう言つと佐倉は、票が多かつたものから順番に曲名を発表していった。最後まで発表し終わると、

「以上です。この結果を今日生徒会に提出して、最終的に採用される曲が決まります。うちのクラスから出た曲もいくつか採用されるかもしれないので、後夜祭を楽しみにしてください」

と言つて報告を締めくくった。皆からパチパチと拍手が起こる。

俺はわけがわからず混乱する頭でそれを聞いていたが、昨日の下校時の光景を思い出して、ようやく悟った。

昨日、妖精が消えた後、佐倉の『帰ろっか』という言葉をきっかけに俺たちは教室を出た。

しかしその直前、佐倉は机の上のプリントを自分の鞆にしまい込んでいたような気がする。

つまり、佐倉は自分の家で1人でプリントの集計をしてきたというのだ。

「おいおい藤原、いつまでボーっと立ってるつもりだ？」

先生の声にハッと我に返ると、佐倉はとっくに着席して俺だけが意味もなく突っ立っている状況だった。慌てて自分の席に座るが、教室は既に爆笑の渦だ。

「何ボケツとしてんだよ藤原あ」なんてヤジまで聞こえてくる。

「……うっさいな、瞑想してたんだよ、瞑想。」

軽口をたたきながらも、俺の心は罪悪感でいっぱいだった。1クラス分のアンケートとはいえ、1人でまとめるのにはかなりの時間が必要だったはずだ。そんな仕事をさっぱり忘れて佐倉に押し付けてしまったなんて――委員の相方として最低だ。

すっかり自己嫌悪に陥った俺は、一刻も早く佐倉に謝ることにした。というか、謝らずにはいらなかった。

しかし、なかなかタイミングがつかめない。佐倉は授業が終わるたびに大勢の友達と喋っているからだ（なんで女子ってやつは、こう、常に群れるんだらう？）。

輪の中にいる彼女に声を掛けるのは想像以上に難しかった。一度、俺が勇気を振り絞って近付こうとしたら、その集団の中で体格も声も一番大きな女子に、まるでゴミでも見るようなすこい目で睨まれ

てしまい、あっけなく失敗した。

そんなわけで謝るチャンスがないまま、午前中はあっという間に過ぎてしまった。

「よう。青春のど真ん中で悩んでるみたいだな。」

「松本……」

昼休み、どうすればいいのか頭を抱えて悩む俺を見かねて松本が相談に乗ってくれる事になった。

さすがに赤い糸のことは話せないのだから、佐倉に謝らなくてはいいけないのだがそのタイミングがつかめない”とだけ言った。

松本のお調子者的な性格から考えるともしかしたらまた茶化されるかもしれないと俺は思ったが、彼は意外にも真剣に話を聞いてくれた。

「そうか。つまりお前は佐倉に謝るのにベストなタイミングがわかんねんだな」

「ああ。スパッとサラッと謝りたいんだけどさ、あんな集団の中にいられると声掛けづらくって……」

俺は教室の隅で談笑している佐倉を含む数名の女子たちを見て溜息をつく。

そしてそんな俺を見た松本は、あろうことかプツと吹き出した。

「何だよ笑うなよ！俺はマジで深刻なのに」

「あー、ごめんごめん。でもなんかさ、お前まるでアレみたいなんだもん」

「アレって？」

俺が怪訝な顔で聞くと、松本は笑いをグツとこらえた声で、

「まるで、告白のチャンスを待ってる男みたいだぜ」

これだけ言つとまたケラケラ笑い出した。松本は笑い上戸なのだ。

「はあ！？」

俺は反論したくてたまらなかったが、こういう時の松本には何を言っても無駄だとわかっていたので大人しく奴の笑いの波が引くの

を待つしかなかった。

1分後、松本は呼吸を整えながら2度目の「ごめんごめん」を言い、再び真面目に悩みを聞く姿勢に戻った。

「よし、俺に任しとけ」

「え？ 任すって…どうするんだよ？」

戸惑う俺をよそに、クラス1の笑い上戸男は不敵な笑みを浮かべる。

「要はお前と佐倉が話しやすい環境を自然に作ればいいんだろ？そおんなのお安い御用だぜ」

「松本……！」

不覚にも俺は少し感動してしまった。ああ、友情って素晴らしい。

「楽勝、楽勝。見てろよ」

松本はそう言い残すとおもむろに女子集団のほうへ歩いていき、わざとらしく咳払いをした後、

「佐倉！」

思いつき呼び掛けた。

その場にいたクラスメイト全員が、松本に注目する。佐倉はビツクリしたように「何？」と言った。俺はハラハラしながらそれを見ていた。松本は一体何をするつもりなんだろう。

「実はな、佐倉。宏樹からお前に話したいことがあるらしいんだ。悪いんだけどあいつと2人で体育館裏に行ってくれないか」

がこ。と妙な音をたてて俺は椅子から転げ落ちた。

そして心の中で絶叫した。松本の奴、呪ってやる！

さっき実感したばかりの友情の素晴らしさが、音をたてて崩れていく。今のセリフのどこらへんが『自然に』なのか説明してほしい。明らかに、誰がどう見ても思いつき『呼び出し』だ。しかもよりによって体育館裏だなんて。これじゃあ、まるで、本当にアレみたいじゃないか？

教室にいた他の女子たちは「告白よ」「告白ね」とひそひそやり

始めた。男子たちは何ともいえない微妙な顔で「マジかよ藤原」などと呟いている（佐倉はその気の強さからクラスのほとんどの男子たちに恐れられているのだ）。

松本はというと、キラキラしたオーラが出てきてもおかしくないくらいの爽やかな笑顔で、俺に向かって親指を立てている。その目が「あとは頑張れ！」と無言で語っていた。

どうやら松本は、本当に真面目に、俺に善かれと思ってあの行動を起こしたらしい。ただ少し、気が早い性格の彼には俺が言う『自然に』の意味が伝わりにくかったようだ。やり方はどうあれ俺のためにしてくれたのだから、何だか腹を立てづらくなってしまい余計に手におえない。

もうこうなったら、今ここで謝るしかない。皆がいる前でなんて死ぬほど恥ずかしいけど、体育館裏に行くよりはマシだ。腹を決めよう。

俺は決心して口を開きかけた。

「あのさ佐倉……」

すると唐突に、佐倉が、

「ちょうど良かった。私も藤原くんに話したいこと、あったんだ。行こう」

と言つてに教室を出てスタスタ歩き出した。クラス的女子たちのひそひそが「両思いよ」「両思いね」に変わり、きゃあきゃあと楽しそうな声をあげる。

「え？」

俺は初め呆然としていたが、松本に「行ってこい色男」と思いつきり背中を押されて、佐倉を追いかけてよろよろと歩き出した。頭の中は、疑問符でいっぱいだ。

「で、話って何？」

体育館裏につくやいなや、佐倉がズバリ聞いてきた。

「そっちこそ何なんだよ」

謝るつもりなのについ突っかかるような言い方になってしまった。こつという時の素直じゃなさには我ながらげんなりしてしまう。

昼休み中ほとんどの生徒は校庭か教室にいるので、体育館裏はまるでそこだけ別世界のように静まり返っている。校庭で遊ぶ生徒たちの歓声や話し声が、たまに小さく聞こえてくるだけだ。

「そっちが最初に言い出したんだから、先に言つてよ」

俺は今度こそ、謝る決心を固めた。

「あのさ、その、つまり……」

「ん？」

「……………ごめん」

佐倉はきょとんとして俺の目を見た。

「何が？」

全くわかっていない様子だ。

「だからさ、昨日の集計、お前1人でやってきたんだろ？ 一応俺も委員なのに。俺、赤い糸の事で頭いっぱいでした。そんな仕事すっかり忘れてた。1人であんだけまとめんの大変だったよな。ごめん」

ようやく、謝ることが出来た。

すると、それを聞いていた佐倉の目がこれ以上ないくらいに丸くなる。

そして、

「……………ぷっ…ふふ」

「へ？」

「あははははっ」

急に笑い出した。

「さ、佐倉？ 何どうしたんだよ」

俺はわけがわからずにますます混乱するばかりだ。佐倉もなんとか答えようとするが、笑いながらではどうも上手くいかない。

「あはは、ご、ごめん……………ふふっ、でも、藤原君おかしいんだもん……………あははっ」

それから佐倉は腹を押さえながらきつかり3分間笑いつづけ、俺は佐倉の笑いが「クスクス」におさまるまできつかり3分間待った。俺は、もしかしたらこいつも笑い上戸かもしれないな、とぼんやり思った。さつきも言ったが、俺の教訓から考えると笑い上戸の人間が笑っている時は、何を言っても無駄なんだ。

「はあ、やっとおさまった。ごめんね藤原君」

佐倉が目元の涙を拭いながら言った。

「で？ 何がそんなにおかしいんだよ」

俺は3分も待たされ少しイライラしながら言った。

「だって……藤原くん、そんなこと気にしてたの？」

「え？」

佐倉は、こっちが拍子抜けするほどあっさりと言い放つ。

「家で集計やつてくるくらい何でもないわよ。ていうか、私そういう作業けっこう好きだし」

「いや、でも！ やっぱ俺もいっしょにやるはずだった仕事だしさ。だから謝ろうと思って……」

「ああ！ だから藤原くん今日はやたらと女子の輪に近付こうとしてドン子に睨まれてたんだ」

ドン子というのは、俺が女子の集団に接近しようとした時に睨んできた、体格と声が大きい女子のあだ名だ。まったく、名は体を表すとはよくできた言葉だ。おそらく漢字で書けば『首領子』だろう。「だからね、“そんなことずつと気にしてたなんて律儀だなあ”って思ったら何かおかしくなっちゃって。ごめんね」

佐倉はまだ少しクスクスしながら再び謝ったが、俺は何だか拍子抜けしてしまった。今日1日、さんざん気にして悩んできたのは一体なんだったんだ。まるで今日だけで5年分老けこんだような気分だ。

「まあ、いいや……。もともとは俺が原因なんだし……」

俺は急に肩の重荷が下りたせいかな今までの疲れがドツと出てきて、

少しげっそりしてしまった。

「で、お前のほうの話は何なんだよ？」

「ああ、実はね……」

佐倉は嬉しそうににっこり笑った後、言った。

「赤い糸についての情報が、手に入ったのよ」

第5話・・・少女は夢見る』

「赤い系についての情報が、手に入ったのよ」

この知らせに、俺のテンションは一気に上昇する。

「赤い系の情報って……ひょっとして系ほどく方法が見つかったのか!？」

俺のあまりの喜びように佐倉は少し申し訳なさそうな顔をした。

「そこまで具体的な情報じゃないんだけど……。うーんとね、赤い系の情報っていうより“赤い系の情報に近付くための情報”って感じがな」

「なんかややこしいな……。で、何？」

「あのね、私、部活の後輩に長岡由紀子ちゃんって子がいるの。それでね……」

「ちよつと待った」

俺は右手を挙げて佐倉の言葉を遮った。何とも初歩的な質問が頭に浮かんだからだ。

「お前って何部だっけ？」

「……………」

佐倉はひどくげんなりした表情で言った。

「一応、テニス部の副部長なんですけどね。クラスメイトの部活くらい覚えといてよ」

「んなこと言われても覚えてないもんはしょうがないだろ。じゃあお前は俺が何部か即答できんのかよ」

俺に反論され、佐倉は自信満々に言った。

「当たり前よ。えーと、確か……バスケットでしょっ？」

「……………」

「えっ……もしかして間違ってた？」

「一応、陸上部の平部員なんですけどね」

さっきの佐倉の口調を真似て言い返してやった。

真似された本人は少し気まずそうな苦笑いを浮かべて詫びる。

「ご、ごめーん……」

「ああそれよりも、そのテニス部の後輩の何とかさんがどうしたって？」

赤い糸のことを思い出し、話題を元に戻す。

佐倉はまた落ち着いて話し始めた。

「うん。実はね、今日の朝、家の前で偶然その長岡さんと会って、いろいろ話しながら一緒に学校まで来たの。それで私、情報収集のためにと思って、誰か知り合いにこの中学の卒業生はいないかって聞いてみたのよ。そしたらね……」

ここで一旦息継ぎすると、嬉しそうに一気に言った。

「何と！ 長岡さんのお母さんがこの卒業生なんだって。しかも、30年前のね」

「マジ！？」

30年前といたら、あのオヤジ妖精が間違って例の2人を糸で結んでしまった頃の年だ。

「だから今日の放課後、長岡さんの家に寄っておばさんからいろいろ話を聞かせてもらおうと思って。長岡さんに頼んでみたらOKしてくれたわ。もちろん藤原くんも来るわよね」

「おう」

俺は意気込んで頷いた。

もしかすると、何か赤い糸の重要な情報を聞くことができるかも知れない。これで喜ぶなと言うほうが無理だ。

「……あ、でも」

俺はあることに気付いた。

「俺たち今日も放課後、文化祭実行委員の仕事があるんじゃないか？ それにお互い部活だつてあるし」

「あら藤原くん忘れてるの？」

「へ？ 何を」

「今日から文化祭準備期間だから運動部の活動は一切休止なのよ。……まあ確かに委員の仕事は少し時間がかかるかもしれないけど、できるだけ早めに片付けて、長岡さんの迷惑にならない時間に行きましょう」

文化祭準備期間の特別ルール——すっかり忘れていた。

うちの中学校には、文化祭の1週間ほど前から運動部は休みになるという決まりがある。そのぶん文化祭の準備に情熱を燃やせ、ということだ。

一応毎日部活を楽しんでいる俺にとっては嬉しくない決まりだったが、今回ばかりは好都合だ。

「それじゃあ今日の放課後、決まりね？」

佐倉が学級会の司会者みたいに言う。

こうして今日の放課後、赤い系の情報を聞くために30年前の卒業生を訪ねることが決まった。

その時、まるで俺たちの話がまとまるのを待っていたかのように、予鈴が鳴った。昼休み終了5分前を告げるチャイムだ。

「あ、そろそろ教室に戻らなきゃ」

佐倉は何ともなしに言ったが、俺は教室という単語を聞いて、こへ来る前の「告白よ」「告白ね」の状況を思い出し1人青ざめた。「うっわ……教室入りづれえ……」

「え？ なんでえ？」

急にマリンブルー色に染まり始めた俺の顔を覗き込むようにして、佐倉が言った。

どうやら彼女は、またもや全くわかっていないらしい。幸せな性格だ。

「あのなあ！ 俺たちはクラスの皆に、その……こっ、告白のために体育館裏へ行ったって誤解されてんだぞ！」

言いたくもない単語のところで少しもってしまったが、それを

聞いた佐倉は俺以上に派手につつかえた。

「ええ！？　こ……ッここここ告白！？　嘘っ！？」

「お前あの状況で全然わかってなかったのかよ……」

「だ、だってそんなのわかるはずないじゃない……！　あつ、だからあの時みんな妙にひそひそしてたの！？　ああもう最悪！　恥ずかしくて教室入れないわよ！」

俺はマリンブルーだったが、佐倉は茹でダコのような顔色だった。シヨクなのはわかるが、あの時の教室内の空気に気付かなかったのもどうかと思う。

戻りたくない気持ちはやまやまだったがこのままだと本鈴が鳴り授業が始まってしまう。2人そろって授業にまで遅れたら、それこそ何を言われるかわかったもんじゃない。

俺たちは重い足を引きずりながら、校舎へ戻った。

意を決して教室のドアを開けると、クラスメイトの視線が突き刺さり、囁し声が一斉に飛び交う——と思いきや、意外にもからかう奴はいなかった。噂話の好きそうな女子何人かが何か聞いた気にこつちをチラッと見たものの、それ以外はごく平和ないつも通りの教室の風景だ。

俺と佐倉はホッと安堵の溜息をついた。

「よかった。もうみんなこの話題には飽きたのかしら」

「みたいだな。飽きっぽいクラスでよかったよ……」

妙なところに安心感を持ってしまった。

ホッとしていると、クラス1の笑い上戸男が肩を叩いてきた。

「よっ宏樹。上手くいったのか？」

「松本。ああ、さっきは素晴らしいきっかけ作りをありがとよ」

俺が皮肉ったことにも気付かず、松本は「やっぱり俺の協力のおかげだよなあ」などと満足そうに1人で頷いている。

「感謝しろよ宏樹、おまえらが出てった後、俺がクラスのみんなに説明しといてやったんだから」

「お前が？」

「あいつら、告白だカップル誕生だーとか今にも祭りでも始めそうな騒ぎだったからよ、俺が言つといた。宏樹は佐倉に謝らなくちゃいけないことがあって、それで呼び出しただけだって」

どうやら騒ぎが収まったのは、クラスの飽きっぱさではなく松本のおかげらしい。

さっき崩れた友情の素晴らしさが少しだけ修復された。

「そうだったんだ、サンキュー松本」

「ありがとう松本くん」

隣の佐倉もホッとしたように礼を言った。

すると松本は佐倉の方に向き直りニカツとして、

「佐倉も、こんな奴と一緒に委員やることになって大変だと思うけどさ、まあ根はいい奴だから仲良くしてやってな」

とまるで母親みたいなことを言い出した。

「は？ 松本、何言って…」

慌てる俺をよそに、佐倉はいつもどおりの笑顔で答えた。

「うん」

完全置いてけぼり状態の俺の傍で、2人はにこにこ顔で頷きあった。

……なんか腹立つなあ。

「あーあ、終わんねえ……帰ってえ……」

「ほら、さばらないで手エ動かす！ さっさと終わらせないと長岡さんのトコに行くのが遅くなっちゃうわよ」

佐倉の声が響き、俺はしぶしぶ手を動かす。

放課後の教室。俺たちはまたしても委員の居残り作業にあくせくしていた。

本日の仕事は『メニューの絞りこみ』。メニューというのは、俺たち2年3組が文化祭の出し物としてやる『他とはひと味違うぜタコヤキ屋』のメニューのことだ。ただ普通に売るのはなく少し変わったタコヤキを売る、という店なので、当然様々な種類のメニューが必要となってくる。

そのオリジナルメニューのアイデア募集のためにクラス全員に書いてもらったアンケート——うちの担任はなぜかアンケート好きだ——の中からどれを採用するか決めるのが今日のノルマだ。これが意外と難しい。

「ふーん。チョコレート入りタコヤキはまあまあおいしそうね。キムチ入りタコヤキなんて売れるかなあ……うえ、納豆入りだって。

誰よこんなの書いたの」

「フーかすでにタコヤキじゃねーよ、それ」

アンケート用紙と睨めっこしながらどんなメニューが売れるか、なんて考えていると、だんだん頭の中がタコヤキで埋め尽くされていくような気になってくる。もう当分、タコヤキは食いたくない。

そもそもタコヤキ屋をやる、ということは2週間以上前のホームルームで決まっていたのだから、もっと早くメニュー決めの作業に取りかかればよかった。何しろうちのクラスはエンジンがかかるのが遅い。

その分これから1週間、きっと死ぬほど忙しくなるだろう。そう思うとつい、ため息が出る。

そして、何とか良さそうなメニューを十数個選び抜き終わった頃にはもうかなり遅い時間になっていた。

「うわぁ、もうすぐ6時よ。結構時間かかったね。急がないと」

「ああ。話聞ける時間がどんどん減ってくしな」

佐倉がアンケート用紙を几帳面にぴっちり揃えて片付け（最初、俺はバラバラのまま鞆に押し込もつとしたのだが彼女にはそれが耐えられないらしくすばやく奪われてしまった）、俺たちは急いで教室を出ようとした。

「……あ」

「どうしたの藤原くん」

入り口近くで急に止まった俺を佐倉は不思議そうに見た。

「あのさ、一応妖精に報告してから行かない？」

「え？ 報告って？」

「赤い糸の情報が手に入るかも知れないってことをあのオヤジ妖精に報告したほうがいいと思うんだ。ほら、あの妖精かなり自分のこと責めてただろ。だから、俺たちは順調にいつてるってことを知らせて喜ばせてやろうぜ」

幸い、付近に人のいる気配はない。妖精を呼び出すには絶好のタイミングだ。佐倉は時計を少し気にしたが、

「そうね。妖精さんに報告してから行きましょう！」

と頷いてくれた。

確か妖精の話だと「昨日と同じ時間にこの教室で私の事と呼んでくれれば、私は現れる事が出来る」らしい。時間は昨日とほぼ変わらないし、あとは彼の名前を呼べば問題ないはずだ。

「おい、オヤジー！」

俺の声が空しく教室に響いたが、妖精は現れない。

佐倉が俺を睨みつけた。

「だめよ“オヤジ”だなんてそんな呼び方……。ちゃんと“妖精さん”って呼んであげなきゃ」

「ええ……？」

かなり恥ずかしい呼び方だが、仕方ない。

「よ、妖精さん……」

「妖精さん出てきてください！」

俺と佐倉の声がさっきの2倍の大きさに響き渡る。傍から見たらかなり危ない2人組だ。

しばらく呼び続けると、突如、教室の後ろで赤い煙が弾けて視界を遮った。

煙は数秒間空中を漂っていたが、やがて霧が晴れるように消えていった。

そして、教室の隅には――やっぱり、オヤジ。

「やあ君たち。さっそく呼び出してくれたようだね」

昨日と変わらずどこまでも紳士的な口調だ。1日たったオヤジは、少し元気を取り戻したように見える。

できれば会話を楽しみたいところだが、残念ながら時間が無い。

「オヤジ、実は嬉しい報告があるんだ」

俺たちはこれから後輩の家に行くことを手短かに説明した。

「そうか、それはいい！」

オヤジは嬉しそうにそう言つと、一言付け加えた。

「私からも良い知らせがある。実は、30前の2人について思い出したことがあるのだよ」

「本当！？」

思わず2人そろって叫んでしまった。

「ああ。昨日君たちが帰った後に、何か役に立ってないかと思い当時の記憶をたどつていて思い出したんだ。糸をほどこためのヒントになるかはわからないが」

「どんな情報でも全然かまわないわよ！で、何？」

オヤジは一度咳払いした後、

「その2人の女子の方なんだが、確か皆からカナと呼ばれていたよな気がする」

遠い昔を思い出すように言った。

「カナ……」

俺は思わず繰り返した。

「本名が思い出せなくて申し訳ないのだが……」

「いや、これでも十分すごいヒントだよ」

「そうよ。ありがとう、妖精さん」

お礼を言い、佐倉は教室の壁に掛けられた時計を見た。

「そろそろ本当に急がなくちゃ。これ以上遅くなったら長岡さんに失礼よ」

時計の針はもう6時をまわっている。確かに、人の家を訪ねるのにあまりいい時間とは言えないだろう。

「じゃあオヤジ、慌ただしいいけど俺たちもう行くよ」

「ああ。私もまた何か思い出せるように努力してみるつもりだ。君たちも、何か良い情報が得られるように祈っているよ」

妖精の言葉に頷くと、俺たちはダッシュで教室を後にした。

外に出ると、秋らしいひんやりとした空気が体を包んだ。
もう辺りは薄暗くなっている。

「多分こっちの道だと思うんだけど……」

本人に書いてもらったという長岡家までの地図を片手に、佐倉は学校の側の細い道に入った。

声はかなり自信なさげだ。

「本当にこっちであってんの？」

「多分……」

仕方なくしばらく黙々とその細い道を歩いていたのだが、いつまでたってもそれらしい家に着かない。佐倉が地図をぐるぐる回転させる。

「……道が間違ってるんじゃないか？」

「うーん、そうかも……。私も行ったことないからよくわかんなくて」

ただでさえ時間が遅れているのに道にまで迷ってしまったたらまらない。

佐倉の手から地図を取り、よく見てみる。驚いたことに今いる場所が目的地とは見事に正反対の方向だ。

「いくらなんでも間違えすぎだろ」

俺が呆れて言うと、佐倉はまた茹でダコの顔色になった。

いつそ『他とはひと味違うゼタコヤキ屋』の具になってほしいくらしいの立派な茹で具合だ。

「こついつの苦手なの」

「佐倉つて方向音痴？」

「……ちよつと道がわからなくなりやすいだけよ」

それを世間一般では方向音痴というのだが。

とにかく俺たちは（もちろん今度は俺が地図を持ち）正しい道を急いだ。

「地図どおりだと、このまままっすぐ行けば着くよ。それにしても佐倉が方向音痴だなんて意外だな」

「だから違うつてば……。でも、確かに昔からそうなのよ。幼稚園の散歩時間の時も1人だけはぐれてたし、小学校の遠足でも迷子になったわね」

「相当だなあ……」

これで将来大丈夫なのだろうか？ と、つい余計な心配までしてしまう。

そんなことを考えていると、俺の頭の中に『将来』の単語が引っ掛かった。

「そつえばさ……」

と俺が口を開きかけたその時、

「あ、佐倉せんぱーい！」

小柄な女の子がこっちに走ってくる。

足を踏み出すたびに、短い髪を無理矢理結んだようなみつ編が肩で揺れる。

「長岡さん！　もしかしてずっと家の前で待っていてくれたの？」

「はい。なんか遅いから、佐倉先輩また道に迷ってるんじゃないかと思って……」

「ごめんね。遅くなっちゃって……」

どうやらこの小柄な少女が長岡由紀子、そして目の前に建っている白い洋風の家が彼女の家らしい。

「あ、このう、こっちの先輩は……？」

長岡由紀子が俺の方を見て小首を傾げた。

「あ、同じクラスの藤原くんよ。一緒に話を聞きたいんだけど、いいかしら」

「もちろんです。よろしくお願いします！」

勢いよく頭を下げられ、俺も慌てて挨拶し返す。ものすごく礼儀正しい子だ。

「それじゃあ、どうぞ入ってください」

招き入れられ家に入ると、今度は彼女の母親が出迎えてくれた。

「あらあら、いらっしやい。由紀子から話は聞いているわ。あなたたちが、学校の歴史について知りたいっていう生徒さんね」

なるほど、佐倉はそう理由付けしたのか。確かに「赤い系について知ってることを聞かせてほしい」なんて急に言ったら誰でも変に思うだろう。

「はい。ぜひうちの中学の卒業生の方にお話を聞かせてもらおうと思って。遅い時間になってしまってますみません」

佐倉が頭を下げ俺もワテンポ遅れてそれに倣うと、長岡由紀子の母親は「いいのよ」と気さくな笑顔で答えた。

それにしても、この親子は驚くほど似ている。さすがに髪形は違うものの、母親の方は長岡由紀子をいくらか老けさせたような顔立ちで、きつと他人が見ても一目でこの2人が親子だとわかるだろう。

「さ、座って」

長岡母が俺たちにソファアを勧め、長岡ジュニア——由紀子の方が「どうぞ、先輩」とお茶を出してくれた。身のこなしから雰囲気までそっくりだ。

俺が人知れず遺伝子の力に感心させられている隣で、佐倉はさっそく本題を切り出した。

「私たち、ちよつと授業で学校の歴史に関する調べものをしていて生徒たちの間で昔からある言い伝えみたいなものについてお聞きしたいんです」

「言い伝え？」

俺たちの向かい側のソファアに座った長岡母は不思議そうな顔をした。

「はい。例えば……赤い糸の伝説とか、ご存知ですか？」

佐倉の問いかけに、長岡母の表情がパツと輝く。

「ああ！ 赤い糸ね！ 私が学校にいた頃からあったわよ、その言い伝え。懐かしいわぁ」

「あの、詳しく聞かせてもらえますか」

俺が言つと、長岡母は遠い目をしながら話し始めた。

「ええ。確か、文化祭の7日前に恋人同士で教室に残っていると妖精が現れるっていう伝説よね。結構有名だったけど、信じてる人はあまりいなかったわねえ。私も、素敵な言い伝えだとは思ってたけど、信じてはいなかったわ」

やっぱりこの言い伝えは当時からあまり信じられていなかったようだ。

それにしても、今まさに目の前に赤い糸で結ばれている2人がいるとわかつたら、どう思うだろうか？

でもね、と長岡母は続けた。

「当時私より1つ上の先輩で、赤い糸で結ばれてるんじゃないかつ

で噂されてる2人がいたの」

「え!？」

俺と佐倉は思わず顔を見合わせた。

「本当ですか!？」

「ええ。その2人、それまではただのクラスメイトだったのに文化祭の時期から急に付き合い始めたのよ。だから、赤い系の言い伝えを試したんじゃないかって学校中で噂になったの」

もしかしなくてもその噂の2人が、俺たちの探している例の30年前に赤い系をほどこいたという2人なのか？

「その2人の名前とか、覚えてますか？」

「うーん……何だったかしら。学年が違ったし……そんなに規模が大きくない学校とはいえ、あまり話したこともなかったから思い出せないわ……」

「もしかして女子の方はカナっていうあだ名じゃありませんでしたか？」

「あ、そうそう!　そういえば女の先輩はカナって呼ばれてたわ!　肌が白くって綺麗で、白雪姫みたいな美人さんだったのよー」

俺と佐倉は、また無言で顔を見合わせた。

やっぱり——カナだ。

しかしその直後に、長岡母が呟くように口にした言葉で俺たちは更に驚くことになった。

「もしかするとそのカナさん、今もこの近所に住んでるかもしれないわ」

「えっ!？　本当ですか!？」

あまりの俺たちの驚きように、今まで黙って話を聞いていた長岡ジュニアの方がびっくりしている。

「ど、どうしたんですか先輩たち……。ひょっとして、そのカナって人と知り合いなんですか？」

慌てて佐倉が言い訳する。

「あっ、そういうわけじゃないんだけど……。つまり、えーと、そ

んな素敵な伝説を体験した人がこの近くに住んでるなんて知らなかったから、つい興奮しちゃったの。あの、それよりもカナさんがこの辺りに住んでるかもってどういうことですか？」

「ええ。実は私、10年くらい前にこの辺りで彼女らしき人に会ったのよ」

「何か喋ったんですか？」

「いいえ。遠目だったし、私その人の名前も忘れてるくらいだったから……。でも中学時代の面影がはつきり残ってたから、その人だっけわかったの。昔と変わらず、色白の綺麗な人だったわ。もつとも、その人が今もここに居るかわからないし、本当にその人がカナさんだったかもはつきりしないけど……。ごめんなさいね、私が知ってることはこのくらいしかないわ」

30年前に赤い糸をほどいたという『カナ』がこの近くに住んでいるかもしれない。

いくら不正確でも、俺たちを仰天させるのには十分すぎる情報だった。

「いえ、そんな……いろいろお話が聞けて、よかったです。ありがとうございました」

その佐倉の言葉をきっかけに俺たちは席を立った。

長岡母が、夕飯を食べていかなかったと言ってくれた。今夜の献立はタコヤキだそうだ。俺と佐倉は丁重にお断りした。

「それじゃあ先輩、また明日学校で会いましょう」

玄関まで見送りに来た長岡ジュニアが礼儀正しく頭を下げ、ドアが静かに閉まった。

外に出て2人きりになった瞬間、俺たちは早足で歩きながらハイテンションで一氣にまくしたてた。

「すっげーいい話聞けたな！」

「うん、もう本当びっくりしちゃったわよ！ まさかそのカナって人がこの近くに住んでるかもしれないなんて……」

「会えたらいいんだけどな。そしたら赤い糸についていろいろ聞けるのに」

「そうよね」

ここで佐倉は頷いた後、

「でも……」

と不可解そうに眉を寄せた。

「妖精さんの話だと、その30年前の2人はただのクラスメイトだったんでしょ？ でも長岡さんのお母さんは、2人は文化祭の頃から付き合い始めたって言ってたわ。どういことかしら」

それは俺も不思議に思っていた。

2人はただのクラスメイトだったのか、それとも恋人同士だったのか。その部分が、オヤジと長岡母の話ではだいぶ食い違っているのだ。

「どっちが本当なんだろう？ オヤジに聞けばわかるかな」

「そうね。明日また妖精さんに会って話しましょう。今日聞いたことを伝えれば、何か新しいことがわかるかもしれないし……。あ、じゃあ私、家こっちだから。また明日ね」

佐倉が小さく手を振りつつ、俺の家とは反対方向の曲がり道に足を進める。

「あ……。うん」

俺は中途半端な高さに手を上げながら、その背中を見送ろうとした。

が、急にある疑問が頭に浮かんだ。

——あれ？ こういう場合って、家まで送るべき？

恋愛経験ゼロの冴えない男子中学生である俺は、こんな時間まで異性と出かけていたことなんか一度もない。

だからこういうとき、どうすればいいのか全くわからない。

恋人でもない男に送られるとか気色悪いかな。明日学校に行った

ら佐倉が女子軍団に「藤原君マジきもいんですけどー」とヒソヒソやっていて、またドン子に睨まれるかな。

しかし、もう辺りは暗いし、この周辺の道は人通りも少ない。そして極めつけはあの方向音痴ぶりだ。

だから 気が付いたら、だんだん遠ざかっていく後ろ姿を呼び止めていた。

「佐倉」

名前の主は、急に呼ばれたことに驚いて振り返った。

今日の教室で松本に呼ばれた時と似ている、不意打ちをくらったような顔で。

「何？」

「あのさ、もう遅い時間だし、1人だと危ないし……」
なぜか心臓が無駄に早鐘だ。

自分がこんな台詞を言うことになるとは思ってもいなかったからか？ 確かに今までの自分の人生には縁のなかった言葉だ。

「家まで送るよ」

人が苦戦してようやく言った言葉の余韻を、佐倉はなんとも間の抜けた声で破ってくれた。

「え？ 大丈夫よ、そんな。このくらいの時間なら全然平気だし」
「危ないから、この辺、結構。いいよ。送ってやるよ俺が」

慣れない台詞の緊張のせいかな、文法がめちゃくちゃになる。しかも最後のほうは少し偉そうだ。

「え、でも」

「いーからいーから」

佐倉は初めポカンとしていたが、やがて呟いた。
「ありがとう」

彼女らしくない、蚊の鳴くような声だ。

人通りの少ない夜の道に、2人の靴音がびっくりするくらい響く。
「あ、そういえば藤原くん」

歩きながら、佐倉が言った。

「長岡さんのうちに入る前、何か言おうとしたけど、何？」

「ああ、別にたいしたことじゃないけど。お前が昨日、将来花嫁になるのが夢だつて言つてたの思い出して、いまだ花嫁なんて珍しいなーって……」

「あら素敵じゃない、花嫁さん。幼稚園の頃からずっと憧れてるの。昨日から何回見たであろう、夢見るような表情で佐倉は話した。」

「大好きな人のお嫁さんになれるなんて、本当に素敵」

「へいへい。どうせ愛しのタカナシクンだろ」

「たちまち佐倉は本日3回目の茹でダコ警報発令中だ。」

「そういう藤原くんは将来何になりたいのよ」

「え!？」

急に聞かれて困つてしまった。そりゃ俺だつて小さいころは、何とかレンジャーになりたいとか何とか戦隊に入りたいとか無邪気なことを言っていたが、もう14歳だ。自分が世界を救うヒーローになれないことくらいは十分わかつている。

将来の夢なんて、最近は考えたこともない。

「何つて言われても……俺はまだ別に決まつてないよ」

「ふうん」

佐倉が疑わしい目つきでこっちを見る。

「何だよ。本当に決まつてないんだつて」

「じゃあ決まつたら教えて」

「は？」

会話についていけない俺に、佐倉は人差し指を突きつけた。

「だって、藤原くんだけ私の将来の夢知ってるなんてずるいわよ。だから、藤原くんの将来の夢が決まつた時に、私にも教えて！」

「いやいや、ずるいつて言われても」

そもそも、俺が問い詰めたわけでもなく、佐倉のほうから自分の夢を言ったんじゃないわけ。しかし、理不尽さを感じながらもなぜか頷かされてしまうパワー

が佐倉にはあった。

「約束ね」

「はあ……」

曖昧に承諾する俺を見て、佐倉は指切りげんまんを迫ったがそれだけは力いっぱい断った。中2にもなってそれはさすがに恥ずかしくない。

佐倉はしばらく楽しそうに笑っていたが、ふと考え込むように呟いた。

「……何か不思議よね」

「不思議？」

「うん」

歩調を緩め、ほとんど独り言のような口調で彼女は話し始めた。

「私たちって赤い糸のことがあるまでは、ほとんど関わりがなかったじゃない？同じクラスっていつても、あんまり話したことなくて……お互いの部活も知らないくらいだったし」

確かにそうだ。

クラスメイトというだけで、俺は佐倉のことを何一つ知らなかった。

例えば笑い上戸とか、例えば方向音痴とか。

「でもね、今はこうして並んで道を歩いて将来のこととか話してるなんて……不思議よね」

「そうだな」

もしあの時オヤジが現れなかったら、もしあの時ジャンケンで勝って委員になっていなかったら。

きっとほとんど言葉を交わすこともなく過ごしていただろう。この隣にいる彼女とは。

「私は結構、嬉しいかな」

それは本当に小さい、ささやくような声だった。だから俺は間抜けな顔で聞き返すことしかできなかった。

「え？」

「何でこんな奴と結ばれなきゃいけないのって昨日は思ったけど。赤い系のおかげでこうしてちよつと仲良くなれたんだったら、私は

……まあまあ嬉しいって思えるわよ、今は」

思考回路が真っ白になり、血が頭部に逆流する。

あまりにも言われ慣れていない種類の言葉だったからだ。

固まる俺をよそに、佐倉はすぐ傍にあるレンガ造りのマンションの入り口の前に立った。

「私の家ここだから。ありがとう、送ってくれて」

そして軽く手を振り、

「明日も委員会とか文化祭の準備とかいろいろ大変だけど、頑張ろうね」

自動ドアの中へ、消えていった。

取り残された俺はぼんやりと考えた。

これから1週間、きつと死ぬほど忙しくなるだろう。赤い系について、わからないことだらけだ。

だが不思議とため息は出なかった。

それどころか、冷たい空気の中で響く自分の靴音さえも、魅力的な音楽のように聞こえてくる。

理由は、わからないけれど。

第6話・・・『白馬に乗った王子様』

突然だが、美味しいタコヤキ作りの鉄則は3つある。

- 1、すばやくひっくり返す
- 2、火加減はこまめに調整
- 3、外はカリッと中はトロツと

——これがなかなか難しい。

調理室に集まった2年3組31人全員の視線が俺の手元のプレートに注がれる。そして、

「きゃー焼きすぎよ焼きすぎ！」

「うお」

室内に焦げたタコヤキの匂いが広がり、数人の生徒から落胆の聲があがる。

「あーあ焦げちゃった」

「藤原の下手くそー」

我ながら見事な焦がしっぷりだったので、さすがに反論は難しい。

「ど、どうもすみません……」

汗をかきかき謝るしかない。

こんな羽目になったのも、そもそもあいつの一言が原因だ。

「じゃあ、とりあえず練習ってことで実際に作ってみない？」

今朝のホームルームでタコヤキ屋のメニューをみんなに発表した後、佐倉は事も無げに言った。まだ材料も揃っていないというのだ。ところがこの提案にクラス全員がノリノリで、

「いいともー！」

一斉に叫んだのだった。

「でも材料とかはどうする？」

俺が問い掛けると佐倉はあっさりと答えた。

「学校が終わった後すぐに全速力で走って近くのスーパーまで買いに行つて、また全速力で学校に戻る。お金は文化祭の費用内なら先生に言えば貰えるし、調理室は許可を取れば放課後だって使用OKじゃない。何にも問題ないわよ」

「それはわかったけどさ、その全速力で学校とスーパーを往復する不幸な役割はいつたいこのどなたが？」

不吉な予感が気のせいであることを祈りながら恐る恐る尋ねると、彼女はにっこりと微笑んだ。

「期待してるわね、陸上部員さん！」

そんなわけで俺は放課後学校とスーパーを全速力（途中での10分間の休憩さえ除けば、まあ多分全速力だ）で往復し、クラス全員が待つ調理室に買い物袋を抱えて滑り込んだものの、昨日の朝と同じくゼゼエ言いながらへたり込んでみんながタコヤキ作りを開始するのを眺めていた。とりあえず今日作るのはキムチやらチヨコのではなく、普通のタコヤキだ。すると、

「せっかく材料買ってきてくれたんだから、その礼として宏樹に1番最初にタコヤキひっくり返させてやるーぜ」

などとありがたくない上にわけのわからないことを言い出す男子生徒がいた。またしても「いいともー」の嵐で室内がアルタの雰囲気だ。

「えっ、俺が？ ていうか何でそれが礼なんだよ」

「ほら遠慮すんなって」

別に遠慮しているわけではない。まだヘトヘトなのでもうしばらく休みたかっただけだ。

そして半ば強制的にタコヤキプレートの前に立たされ、その結果ひっくり返すタイミングを間違え非難ごうごう、冒頭に至るというわけだ。

今日は本当についていない。

ねえ亜美も焼いてみてよ、と女子達にせがまれて今度は佐倉がプレートの前に立ったようだ。

俺はそれを少し遠巻きに見ながら昨日のことを考えていた。

『私は結構、嬉しいかな』

昨日の佐倉の言葉が頭で響く。

やたら心臓が早くなるのはさつき全速力で走ったせいだ、多分。それにしても、佐倉は今日も普通に接してくるが、昨日自分が言ったことを忘れているのだろうか？ それともあれくらいの言葉、佐倉にとっては別に深い意味のない弾みで言ったものだったかもしれない。だとしたらあの時あれだけドキドキさせられた自分がバカみたいだ。

もういいや。忘れよう、昨日のことは。

俺は自分に言い聞かせた。

その時、佐倉の周りにいた生徒達が歓声ともざわめきともつかない声をあげた。どうやらタコヤキが出来上がったらしい。人垣の間からひよっこり覗いてみると、間違っても焦げてはいない小さなタコヤキが皿に5、6個ちょこんと盛られていた。

しかし、どうも様子が変だ。俺が作ったタコヤキは黒焦げだったが、佐倉のは妙に白っぽい。周りのクラスメイトも引きつった笑顔で試食の権利をお互い譲り合っている。当の佐倉も、

「何かちよつと病的に白いけど、まあ美白ブームってことでー」

とか何とか言い訳しながらも自分で食べようとしなない。

そして再び白羽の矢が立った。

「おい宏樹、お前同じ文化祭実行委員として毒見……じゃなくて味見してみろよ」

「また俺かよ」

俺は黙って美白タコヤキを眺めた。きつともものすごく情けない顔になっていたと思う。

「あの……絶対おいしくないと思うから無理に食べなくていいよ」

困ったような笑顔を浮かべて言う佐倉を前にして、俺は少しやけくそ気味になってきた。

1つつまんで口に放り込む。すると想像していた通りの味がした。
「……半生」

俺がそう呟くのを聞いて、作った本人は慌てて自分も食べてみる。
「うそっ、そんなはずは……。あ、本当。生だわ」

その後も何人かがプレートの前に立ち挑戦したが、出来上がったタコヤキはどれもあまり美味いとは言い難いものだった。室内の温度が少し下がる。そんな時仕切り直すのが松本の仕事だ。

「とにかくさ、文化祭当日に向けてそれぞれ家で練習してこようぜ。練習すりゃあ何とかなるって、うん」

自分の言葉に自分で納得しているような口振りだったが、この言葉にみんな「そうだよな」とか「頑張ろうよ」とか各自タコヤキ作り上達を決意したようだ。そして今日はここで解散ということになった。

教室に戻り、帰る気満々で準備をしていた俺に、佐倉が小声でささやいた。

「昨日聞いたことについて、今日また妖精さんと色々話しましょう。だから残ってね」

通学鞆を持っていた俺の手をチラリと見て、

「まさか帰る気だったんじゃないでしょうね」

「え！？　そ、そんなわけないだろ。ちゃんと覚えてたよハハハ」

我ながらバレバレな棒読みだ。

時計を見ると、只今の時刻5時12分。オヤジが現れる時間になるまであと40分近く残っていないとはいけない。

みんなが帰った後、俺と佐倉はそれぞれ自分の席に座って時間がたつのを待つことにした。『1番校庭側の前から2番目』の俺と、『その2列右の列の前から3番目』の佐倉、という微妙な距離感でそして今日に限って委員会の仕事も特にないので、とにかく暇だった。

「タコヤキって結構難しいのね。もっと簡単かと思って、甘くみてたわ」

佐倉が溜息混じりに言った。

「そうだな。俺のは黒焦げだし、お前のは半生だし」

俺が笑いながら言うのと、佐倉はいよいよ本格的に意を決したようだった。

「私、文化祭までとにかく練習しまくる。あんなのじゃあ『他とはひと味違うぜタコヤキ屋』なんてレベルじゃないわよ。プロのタコヤキ屋さんに弟子入りでもしようかな」

顔を見るとまんざら冗談でもなさそうなので一応止めておいた。

そんなたわいもない話をしていたが、佐倉が何となく言ったお礼の言葉で俺の心臓はまた早鐘を打つことになった。

「そつえば、昨日はありがとうね藤原くん」

「き、昨日？ 昨日か。うん、べ、別に……」

しどろもどろな俺に対して佐倉は笑い混じりに、やだ何どもってるのーとか何とか言ったが、こっちは自分の心臓の音がうるさくてよく聞くどころじゃない。

『送るよ』だなんて、今考えるとよくあんな恥ずかしい台詞が言えたもんだ。ほんの1日前の自分のことなのに理解できない。でもあの時ああ言わなかったらそれはそれで後悔していただろう。

だから俺はとりあえず、昨日の自分の勇気にひそかに拍手を贈ることにした。

「昨日私が言ったこと覚えてる？」

心臓が飛び出そうになる。

「え？ えーと……何だっけ？」

忘れるはずがない。あんなにビックリした言葉は、いくら脳細胞が少ない俺の頭でも。

『赤い糸のおかげでこうしてちよつと仲良くなれたんだったら、私は……まあまあ嬉しいって思えるわよ、今は』

そう、忘れるはずがないのだ。

でも忘れているふりをした。なんというか、あまりにも恥ずかしかったので。

佐倉は椅子の下で両足をぶらぶらさせていた。うつむき加減の顔は黒い髪で隠れていて表情が見えない。彼女の性格からして考えると、てつきり怒っているのかと思った。

「そつか。忘れてるんだったら、いいや」

「え？ 何が……」

俺がそう言いかけた時、教室のドアがガラツと音をたてて開いた。

「佐倉さん、いる？」

一目見れば佐倉がここにいることくらい一目瞭然だろうが、入ってきた彼はわざわざ言った。合唱部にいてもおかしくないくらい、凜としたいいい声だ。

後光がさしているような錯覚を覚えるほど端正な顔立ち。色白で細身。隣のクラスの学級委員。

面と向かって見るのは初めてだったが、彼のことは俺も知っていた。それどころか、佐倉との会話でよく名前が出てきた人物だ。

自分が想っていた相手に突然名前を呼ばれたことで、佐倉が驚いたように呟いた。

「高梨くん……？」

そう。例のもやしっ子——いや、白馬に乗った王子様だ。

第7話・・・そして、ケンカ。』

王子。白馬。ていうか、薔薇？

しつこいようだけど、見ている人間にそんな類の言葉を連想させる雰囲気振りまいている野郎だったんだ、高梨は。

「探したよ。佐倉さん」

彼にこんな爽やかスマイルを向けられた女子なら、きっと誰でも意識がぶっ飛んでしまうだろう。ましてや名前まで呼ばれてしまった佐倉はすでに頭の中で桜が狂い咲きしていそうな表情だ。（別に駄洒落ではない）

「あの……な、何？」

うわ。どもってるよ佐倉さん。しかも声も震えてる。

高梨の方は相変わらず笑顔のまま、

「佐倉さん前に数学が苦手だって言ってたよね」

「え？ あ…こないだの中間の後ね」

何だ、そんな会話まで交わしているなんて、実は結構親しいんだな。佐倉の奴、高梨はただの憧れの存在、的な言い方をしていたのに。

——とまあこんな感じで、同じ教室ににいるのに完全に部外者となった俺は、何となく2人のやりとりを観察するしかなかった。いやもう暇で暇で。

「僕も数学はあんまり好きじゃなかったんだけど、昨日すごくわかりやすい参考書を買ったんだ。佐倉さんにも見せてあげたいと思うて。だからもしよかったら、これから僕の家で一緒に勉強……」

高梨の視線がほんの一瞬、こっちに來た。何。俺？

「……したいと思ったんだけど。そうか、佐倉さん文化祭実行委員だったよね」

それから再び俺の方を見て、

「藤原くんも」

と、につこり。

俺の名前知ってたのか。少し驚いたがとりあえず曖昧に頭を下げる。なんかこいつとは話しづらい。

「今日も居残りで仕事？」

にこやかに問い掛ける高梨に、佐倉は誤魔化すように乾いた声で笑った。

「えっと、今日は委員の仕事ってわけじゃないんだけどー……ははは」

さすがに妖精を待っているとは言わない。まあ確かにそんな爆弾発言したら、ちよっと頭がお花畑になってる子なんだと思われるのがオチだろうし。

佐倉は少し困ったような顔で考え込んだ。

いやいや、ちよっと待て。ひよっとして断るつもりか？ せっかくもつと高梨とグツと親しくなれるチャンスなのに、どこまで真面目なんだ佐倉亜美。

そして彼女は顔を上げて、

「でも、やっぱり今日は残らなきゃいけないくて、だからごめんね高梨くん、せっかくだけど……」

「行けば？」

急に口を挟んだ俺を、佐倉は目を丸くして見た。

「勉強。してくればいいじゃん、高梨と。せっかく誘ってくれてるんだしさ」

「でも……」

妖精さんと話さないで行くわけにはいかないでしょ。佐倉の目がそう言っていた。

「そんな俺1人でも平気に決まってんじゃない」

オヤジとは俺がしっかり話しとくから。そういう意味を込めた目

で佐倉を見たが、伝わったかどうかはわからない。ただ佐倉は、困った顔で——本当に今までで初めて見るくらい困りきった顔で、俺を見た。

目と目がぶつかる。

急にどうしちゃったの藤原くん——そういう顔だった。

俺だって、何で自分でこんなことを言っているのかよくわからない。でも、赤い糸のせいで好きな人とのことも上手くいかないなんてあまりにも可哀想すぎる気がした。

それに、うぬぼれかもしれないけど、佐倉がどれだけ高梨を好きかはよく知っているつもりだったし。

だったら尚更、今この状況で俺は行けよと言ってやるべきじゃないか、そう思った。

高梨はというと、ただ黙って俺達を見ていた。相変わらずの爽やか王子風スマイルで。

佐倉はこの王子様が好きなんだろ？ だったら迷うことなんてないじゃないか。

「行けよ」

俺がもう一度言っと、佐倉はほとんど唇を動かさずに、俺にだけぎりぎり届くような小声で答えた。

「……駄目だよ」

「行けってば」

思わずぶっきらぼうな口調になってしまった。

これまでも何度か感じたことはあったが、今、改めて思う。

俺は佐倉のことが、全く理解できないんだ。

こんなチャンスなのに迷う気持ちが変わらなくて、正直少しイライラした。

「俺、お前がいなくても別に困らないし」

さすがにこれには佐倉もムツとしたようだった。

「何よ、わざわざそんな言い方しなくても……」

「本当のことなんだからしょうがないだろ。すいませんね正直者で」

俺の態度に対して佐倉の眉がだんだん吊り上がった。

やばい。またケンカモード突入だ。しかし一度火が点いた導火線はなかなか消えてくれない。

「ええ、そうでしょーね。藤原くんは私がいなくなつて一秒たりとも困らないでしょうよ。……私だつて全くその通り、同じよ！」

前半の敬語部分が恐い。本気で怒ってるな、これは。

あ、後ろの高梨の笑顔が少し引きつっている。こんなド迫力な佐倉さんは見たことがなかったのかもしれない。

しかしそんな高梨を気にしていられるほど、俺も佐倉も冷静ではなかった。

「じゃあ行けばいいだろ！ わけわかんねえよ、こんなことで断つたりして。お前、実は馬鹿だろ！？」

佐倉が不気味ににつこりと笑った。ものすごく怒りが凝縮された笑みだ。

「そうね。私が馬鹿だったわ。気付かせてくれてどうもありがとう。さよなら」

吐き捨てるようにそう言う（吐き捨てる……なんて普通女子の口調を表現する言葉じゃないと思う）鞆を引っ掴んで教室を出ていった。高梨が慌てて追い掛ける。

あとに残ったのは、情けない俺と、もやもやする怒りと、少しの後悔。

大声を出したせいで喉が痛い。

熱を持ったみたいにひりひりして、ケンカ後の嫌な感じを無理矢理突き付けてくる。

溜息すら出ない。

あいつもだけど、どうしてこう短気なんだろうな、俺。

馬鹿とか言ってしまったが、俺はそれ以上の馬鹿だ。

ただ、行けよって言いたかっただけなのに。どう考えてもケンカに発展するような言葉じゃないのに。

なのに。

「……どーしてこうなるんでしょうかね、妖精さん」

わざとらしい敬語で呟くと、掃除用具入れの影から見慣れた姿がひよっこり現れた。

「気が付いてたのか、少年」

「目だけはいいからね。いつからいたの？」

「“行けって”あたりだな」

オヤジは禿げた頭をつるりと撫でた。

「すまなかつたね。盗み聞くような真似をして……」

俺はハツと笑い、

「いいよ別に。てか、最初の日と同じ時刻に名前を呼ばないと現れないんじゃないっけ？」

「うむ。どうやら、君とお嬢さんのあまりにも大きい怒鳴り声が聞こえたものだから、何か勘違いして現れてしまったようだ」

「いつもそうだったら俺達も楽なのに。きっちりあの時間まで待たなきゃいけないのって面倒でさ」

それを聞いたオヤジは大げさな身振りで耳に手をあて、

「よしてくれ。その度にあんな大声聞かされたんじゃないやあ、こっちの耳がどうにかなくなってしまっよう」

「……そんなにデカい声だった？」

「ああ。それはもう」

怒鳴ってる時って、意外と自分の声の大きさに気が付かないもんなんだな。まだひりひりと痛む喉に手を当てながら思った。

もう何回目だろう、佐倉とのケンカ。

あの赤い糸で結ばれた日から既に3日がたっている。ケンカは何回もしたけど、まあそれなりに仲良くやっていけそうな気がしたし、佐倉のことも少しわかってきたと思ったのに。やっぱりうぬぼれだったようだ。

なにしろあいつ、俺がいなくても全く全然困らないらしいし。

「……あ、そういえば俺も同じこと言っただけ」

自然と言葉として出た。聞こえないフリをしてくれたオヤジは、本当に優しいと思う。

そう、俺も、困らないのだ。だって現に今、困ってない。

「……今日は男同士で語り合おうな！オヤジ！！」

懲りずにまた大声を出したせいで、声がかすれた。

そんなものが教室内に響いて、何だかひどく情けなかった。

第8話・・・『2人』（前書き）

今回は佐倉メインの3人称です。

第8話・・・『2人』

「ごめんね佐倉さん。僕が誘ったりしたせいでケンカになっちゃって」

夕日が射す下駄箱の前。

そう詫びると高梨は整った顔を曇らせた。

そんな彼を見て佐倉は、さっきまでのすさまじい怒りはどこへやら、何ともいたたまれない気持ちになった。

「高梨くんのせいじゃないわよ！ 私達が勝手にケンカ始めたんだから」

高梨は柔らかに笑い、

「優しいね、佐倉さん」

王子スマイル。

心臓が壊れるんじゃないかと、本気で佐倉は思った。

「そ、そんなやや優しいなんて！ 私ホントぜんぜん全然」

ああ、何を言ってるんだろう私——クスリと笑う高梨を前に、佐倉はこういう時の自分のあがり症を呪った。

すでに顔は茹でダコ状態だ。それを誤魔化すために、慌てて靴を履き替えて玄関を出る。

真っ赤な光の中に飛び込むと、自分の顔色も少しは目立たなくなった気がして、佐倉はホッとした。

ゆつくりと、夕日に染まる校舎を見上げる。2回の左端の教室、そこが2年3組だ。

——本当に……。

佐倉は心の中でそっと呟いた。

本当に1人でずっと残るつもりかな。それって寂しくないのかな。その疑問に答えたのは自分自身だった。

寂しくないんだろ？ ううん、絶対。

「どうしたの？」

いつの間にか高梨が隣にいて、佐倉を覗き込んでいた。

「あ……何でもない」

「そう？　じゃ、行こうか」

「うん」

幸せ。

右手と右足が一緒に出そうになるのをこらえながら、佐倉は高梨と並んで歩き出した。

夢にまで見た『2人で下校』。しかも輝く夕日のシチュエーション付き。しかもしかも、この後は一緒に勉強できるなんて。本当に幸せ……なはずなのに。

佐倉は妙な引つ掛かりを感じていた。

気にすることないと自分に言い聞かせるものの、頭の中ではさつきから何度も繰り返される台詞があった。

『俺、お前がいなくても別に困らないし』

さつき王子スマイルで癒されたはずの怒りが静かに再燃焼し始めた。

ふん、ずいぶん素敵なこと言ってくれたものね。皮肉たっぷりにそう思った次の瞬間、

「……あ。そういえば私も」

同じこと言っただっけ。

途中で言葉を飲み込んだものの、前半は思わず口に出た。

「え？」

笑顔で聞き返す高梨に、佐倉は手を大きく振り慌てて弁解する。

「あつごめん、何でもないからホント気にしないでっ！」

「うん」

彼はあっさり納得してくれた。

その態度に、佐倉は小さな感動すら覚えた。何て素直な人なんだろう、と。

おそらくこれが藤原宏樹だったら、へらへら笑いながら「今の独り言？ お前結構そういうの多いよなー」くらいの憎まれ口は叩いていただろう。そしてケンカになる。何回か繰り返したパターンだ。思えば、高梨が好きだということを教えた時もそうだった。人の好みにさんざんケチをつけ、最終的には怒鳴り合いになったのだ。こんな素直でいい人にケチのつけようなんてないじゃない。藤原くん、どんな神経してんのかしら。

隣を歩く高梨を見ながら、佐倉は思った。

「ねえ、佐倉さん」

「ん？」

嫌だわ佐倉さんだなんて、亜美でいいのに……。とは言えなかった。言いたかったが、言えなかった。恋する乙女は複雑だ。

「佐倉さんて、藤原くんと仲いいんだね」

「は？」

「さっきも2人で残って喋ってたしさ。最初は付き合ってるのかと思った」

佐倉は絶句した。

「あ、ごめんショックだった？」

「私、藤原くんとは本当にそんなんじゃないから!!」

無意味に大声を出すと、高梨は苦笑いを浮かべ謝る。

「そうなんだ。ごめん」

「本当だよ？」

「うん」

信じてもらえたことにホッとしながらも、佐倉は一生の不覚を味わった気分だった。

まさか自分の好きな人にまでそんな勘違いをされていたなんて。しかも、今さっき大ゲンカをしたばかりのクラスメイトと——もとい、間違った赤い系の相手との誤解だ。

佐倉は左手の小指を軽く曲げ、恨めしい糸を引っばってみた。こ

の系のせいで、自分の人生は大きく狂い始めているのだ。

思わず溜め息をついた。

何がいけなかったかというと、そもそも文化祭委員になったのが全ての始まりだ。やっぱり止めればよかったかなあ、と今さらながら思う。

最初、2年3組はなかなか委員が決まらなかった。ただでさえエンジンがかかるのが遅いクラスがこれ以上もたつくのは嫌だったし、雑用や企画の仕事は嫌いではなかったので、佐倉は自ら委員を引き受けた。

委員にならなければ放課後居残ることもなかったし、当然妖精に誤解されることもなかっただろう。

そして、あんなふうに委員の相方である藤原宏樹とケン力するということも――

「佐倉さん」

「は、はいっ」

気が付けば、自分の顔をじっと見る高梨が目の前にいた。

「何？ 高梨くん」

高梨は遠慮がちに言った。

「佐倉さん、もしかして今つまらない？」

「思いもよらない言葉だった。」

「え！？ そんなことないよ！」

「ならいいんだけど……ずっと眉間に皺寄ってたから」

「うそ！ ご、ごめん、寝不足かな」

佐倉はゆっくりと顔をあげた。なるべく眉間に皺を寄せないように、意識しながら。

――でも。

もし自分が委員になることもなく、妖精とも会っていなかったら。佐倉は昨日の自分の言葉を忘れてはいなかった。

『私は……まあまあ嬉しいって思えるわよ、今は』

嘘じゃない。本当に、思った。

藤原宏樹とはケンカも多かったが、たわいもない話もして、お互い知らなかった相手のことを知って、糸のために協力したり――。そういうのが、嫌じゃない、と思ったのだ。

協力して糸をほどこう、とも。

さっきの「行けば？」の彼の何でもないような顔。その後の、口ゲンカ。

無意識に左手をかざすと、小指のそれは夕日を受けて輝いた。佐倉の中の何かが止まる。

私は、どうしたいわけ？

「高梨くん」

自分の中の何かが止まった瞬間一緒に足も止めてしまった佐倉は、高梨を呼び止めた。

泣きそうで困惑した、けれど何かを決心した声で。

第9話・・・『嘘』

「でさあ、その時あいつ何て言ったと思う？　『そうよ！　誰があんたみたいなガサツな男子と！』だぜ？　こつちだつてお前みたいな奴ごめんだつーの」

茜色に染まる教室。このムードがある場所には到底相応しくないオカマ口調が入り交じった愚痴を、俺はまくしたてた。

苦笑いでたまに俺をなだめるように軽く頷きながら、聞き役に徹するオヤジ。

佐倉が高梨と出ていって数十分。さつきからずっとこんな状態が続いている。

「しかもそれだけじゃないんだよ、あいつ。その前に俺が高梨の性格に裏がありそうって言ったら、ありえない強さの右ストレート繰り出してきたんだぜ！」

「ほう、それはまた……一途なお嬢さんで」

「一途とかじゃないって。ただの暴力女だよ」

俺は不機嫌だった。

さつきの口ゲンカも、佐倉の妙な生真面目さも、俺の幼稚な短気さも、一瞬こつちに來た高梨の視線も、カナの居所が見つからないことも、出来損ないのタコヤキも、全てがもやもやの原因だった。

「マジ、『藤原くんがいなくても困らない』って、いきなり存在否定かよ。失礼にもほどがあるだろ。まあこつちだつて全然困ってないし。あんな奴いなくなってせいせいしたよ。オヤジとも2人で話せるしなっ」

オヤジは毛の薄い頭をつるりと撫で、勝手にマブダチ宣言した俺をじつと見た。

「では、なぜそんなに悲しい目をしているのだね？　少年」

「は？」

オヤジは視線を外さない。

「オヤジ。ちょっと何言ってるのかわかんないんだけど」

別に嘘を吐いているわけでもないし、罪悪感があるわけでもない。じゃあどうして俺、オヤジの目を真っ直ぐ見られないんだ。

オヤジはもう一度頭を撫でた。

「私は30年以上前から妖精としてここにいるんだ。悲しみを感じている中学生の目くらいは、すぐに気付けるよ」

彼はここで小さく咳払いをして、

「……もつとも、私でなくても今の君の顔を見たら10人中10人が、何がそんなに悲しいのかと聞くだろうが」

ぼそぼそと付け加えた。

「……俺、そんなにひどい顔してるかな……」

「それはもう。ひどい」

「何だよ、ますますわけわかんね……。俺、別に何も……」

「いつも隣にいた人がいなくなるのは悲しいことだ」

ぽつりと、諭すような言葉だった。

「たといいつもは仲が悪くても、ふとした瞬間隣の空間の物悲しさを感じるものだよ」

「誰のこと言ってるんだよ」

オヤジは何も言わない。黙って、俺の次の言葉を待っているようだった。

ゆっくり、左隣を見してみる。

小指から伸びた赤い糸が、本当に悲しいくらいに、眩しい。

これが、空間の物悲しさ？

「……」

無意識に、右手で糸を掴んでいた。

「……そりゃあ、いないよりはいる方が。……俺だって、少しは少しは嬉しい、と思う。」

本当に、本当に少しだけのことなんだけど。

隣が寂しいのは気のせいじゃないはずだ。

いくらあの右ストレート女でも。

「いないと……クウカンのモノガナシサ、かもしんない」

俺の言葉を聞くと、オヤジは押し付けがましくない笑顔で笑った。

「そう思える人がいるのは、幸せなことなのだよ、少年」

「……オヤジ」

何か、初めてオヤジが妖精っぽい気がする。

「それに……」

と、オヤジが言い掛けたその時。

「——しっ」

足音が聞こえた。

いや、聞こえる——進行形だ。

それどころか、パタパタと慌ただしくこの教室に近づいてくる。

「ヤバい、誰か来る！ オヤジ、早くドロンしないとっ」

「ああ」

オヤジは早口で、

「また語れることを願っているよ」

それだけ告げると音もなく消えた。

1人取り残された俺は、迫り来る足音にそなえ息を潜めた。

いや、別に見つかってもまずいことはないのだが。だって俺、こ

の学校の生徒だし。

でも何となく、誰かが足音を響かせこっちに近付いてくる状況の中ではそうしてしまうもんだ。

俺は息を止めたまま、間抜けに口をぽかんと開けた。

だって、ドアを開け立っていたのは、さっき高梨と出ていったはずの佐倉亜美だったから。

佐倉は、今の今まで走っていたように息を弾ませている。

「……何してんの？」

なるべくそっけなく、どうしてもよさそうに。自分では頑張ったつ

もりだが、どうしても驚きが隠せない声になった。

佐倉はゆっくりと呼吸を整えた。

「やっぱり、戻ってきたの」

いや、見ればわかる。

俺が聞きたいのは、そういう事じゃなく。

「何で？」

今度は驚きを隠さなかった。

佐倉はすたすたと歩いてきて、

「ちよつと失礼」

語尾を軽く持ち上げおどけるようにそう言つと、隣に座った。

「私ね」

「うん」

「藤原くんの言う通り、馬鹿なのよ」

「馬鹿？」

「でもね、もう馬鹿でいいの」

佐倉は微笑んでいた。

「確かに今日のチャンスはちょーつと惜しかったけど。でも、今、私が本当にしなきゃいけないのは高梨くんと一緒に帰ることじゃないもん」

そのままの顔で俺の目を見て、ゆっくりと言った。

「私がしなきゃいけないのは、今ここで妖精さんを待つことだって思ふの。藤原くんと一緒に」

1つわかったことがある。

「俺も……俺だって、馬鹿だよ」

その上とんでもない嘘つきだ。

佐倉がいなくても困らないなんて、そんなの。

「……ごめん」

そんなの大嘘だっというのにさ。

第9話・・・『嘘』（後書き）

評価・感想ありがとうございます！！この話は最近全然更新できていなかったんですが、それでも読んでくださっている方がいるとわかってすごく嬉しかったです。

第10話・・・『似た者同士』

隣の佐倉が笑うと、小指の赤い糸が微かに揺れた。夕日を浴びきらきらと光るそれを見て。

俺はもう、悲しいとは思わなかった。

「じゃあ馬鹿同士ね、私達」

「だな。俺達お馬鹿同士、赤い糸で結ばれてるわけだ」

「……なんか全然ロマンチックじゃない響きね」

間違いの糸にロマンを求めちゃいかんだろう。俺はそう言おうとしたけどやめた。なんとなく。

「……だな」

と、さっきと代わり映えのしない相槌を打つ。

少しずつ、空が濃くなっていく。

教室の中は橙色の光でいっぱいだ。

「綺麗だね」

しみじみと佐倉が呟く。

確かに、今まで見た事もないほど鮮やかな夕日だった。いや、それ以前に、俺は最近、こんなにじっくり空の色を見たりしたかな。

そんな事をぼんやりと考えていたら、聞き慣れたわざとらしい咳払いが耳に届いてきた。

「お邪魔をするように悪いんだが……息をつめて物影に隠れる事ほど嫌なものはないからね」

「わっ！オヤジ」

掃除用具入れの後ろからひょこつと現われたのは、紛れもなく赤い糸の妖精だった。

「オヤジ……今度こそいつからいたんだ？」

「ああ、一度は姿を消したんだが、教室に来たのがお嬢さんだとわ

かったので安心してまた出てきたんだ。ただ……」

「ちらり、とオヤジが俺に怪しげな視線を送る。わお。ボクはこの年にして中年男の流し目というものを初めて見てしまいました。」

「心なしか私が出にくい雰囲気だったものでね。ついここで様子を伺っていたんだ」

「へーえ。そりゃー悪かったね」

「いやいや」

妙にぎこちないやりとりだ（あれ、そういえばオヤジは俺と佐倉以外には姿が見えないんだから、さっきあんなに慌てて消える必要はなかったんじゃないか？ ……まあ、いいか。なんとなくあの緊急事態っぽい雰囲気にもまれていたってというのが、多分、大きい）。

オヤジは佐倉に向かい軽くお辞儀をした。

「やあやあ、戻ってきてくれたようだね。また会えて嬉しいよ」

佐倉もにつこりと笑い返す。

「こんにちは妖精さん」

「昨日も会ったというのに、なんだかお嬢さんとはずいぶんお久しぶりな気がするな」

「そう？ 久しぶりって……私達初めて会ったのが3日前よ？」

その佐倉の言葉に、俺の方が驚いてしまった。

「あ、そっか。なんか色々ありすぎてすっげえ長い気がするけど、俺達オヤジと会ってまだ3日しか経ってないんだな」

もつずいぶん長いこと糸で結ばれている気もする。慣れというのは恐ろしいものだ。

「……いつ解けるのかしらね」

ぼつりと佐倉が呟く。

と、唐突に、オヤジがポンと手を打った。

「そういえばお二人さん、昨日は後輩の家へ行ったそうだが、何か親展はあったかな」

俺と佐倉は思わず顔を見合わせた。

「そうそう！ オヤジに話そうと思ってた事があるんだよ！」

俺達は、昨日長岡由紀子の家で聞いた話と疑問——例の30年前の2人は恋人同士だったのか——を争うようにオヤジに話した。

「……うーん……」

話を聞きおわった彼の第一声はこれだった。そして眉間に皺を寄せ、胸の前でがっちり両腕を組んだかと思うと、それきり黙りこくってしまった。

「……おいオヤジ……寝てんのか？」

「しっ」

佐倉が人差し指を立てた。黙れのサインだ。

「きつと思いい出してるのよ……」

そう言う佐倉の顔は真剣そのものだった。

ああ、そうか。今、オヤジは、30年前の記憶を辿っているんだ。妖精の頭の中がどうなっているのかはわからないが、きつと脳みその皺の深い所にある、遠い昔の記憶を探しているんだろう。30年なんて、まだガキな俺にとっては途方も無い年月だ。自分が30年後何をしているかなんて想像もつかない。

たった3日間ですえ、こんなにも長く感じるのだから。

「30年前って……なんか俺達にとってはすっげえ数字だよな」

「うん」

こつくりと頷く佐倉も、もしかしたら同じ事を考えていたのかもしれない。

第10話・・・『似た者同士』（後書き）

2連載同時更新の難しさを痛感です。そして第1話を掲載させていただいてから1年以上経ってしまいました（。□。；）2人、1年も糸で結ばれたままです…

第11話・・・『記憶』（前書き）

今回はオヤジの回想からです。

第11話・・・『記憶』

それは、30年前の出来事。
色褪せ埋もれかけていた、遠い記憶。

「本当に申し訳ない……どうお詫びすればいいものか……」

オヤジこと赤い系の妖精は、小さな体をさらに小さくし頭を下げた。

「いや実は……ここ数年、赤い系の伝説を信じる若者が激減していて……私の出番なんて滅多になかったもんで、だから君達が教室で楽しげに会話していた時は、久々にカップルが訪ねてきたのだとい有頂天になってしまつて……」

「で、間違つて僕達の小指を結んでしまつたつてわけか」

と、整った顔のすらりとした少年が、よく響く声で妖精の言葉を受け取った。彼の左手の小指からは細い深紅の糸が伸びている。

「ああ。だが……一度結んだ糸は、たとえそれが間違いでももう二度と解けない。本当にどうすれば良いのか……」

うなだれる妖精にふわりと笑いかけたのは、これまたモデル体型の色白美少女——通称『カナ』。さっきの少年の赤い糸は、このカナの小指と繋がっていた。彼女が柔らかく微笑むたびに糸がきらりと輝く。

「そんなに気にしないで、妖精さん。なつてしまつたものは仕方ないわよ。ね？」

カナが隣の少年を見遣ると、彼もにつこり笑つて頷いた。

「うん。別に命に関わるわけでもないし、そんなに悲観しないで。」

僕もカナもこれから赤い糸で結ばれたまま生きていきますよ」

「……君達……」

2人のあまりにも寛大な言葉に、妖精は目元にうつすらと涙を浮かべている。

「それにね、私、一度で良いから本物の妖精さんに会ってみたかったのよ。今こうして夢が叶ってすごく幸せ！」

カナが嬉しそうに言い、その傍らで少年も穏やかに笑った。

こうして並んでいると、本当にお似合いの美男美女カップルのようだ。妖精はこんな状況にも関わらず、2人の美しさに思わずほろりと溜め息を吐いた。

「妖精さん妖精さん！」

少年と少女が再び妖精の元を訪ねたのは、それからちょうど1週間後、文化祭当日の夕方だった。

「どうしたんだね2人とも……そんなに息を切らして」

外ではすでに後夜祭の片付けが始まり、校庭に取り付けられたスピーカーから文化祭終了を告げるアナウンスが流れている。

しかしそんな事にもお構いなしに、美男美女2人は興奮した様子で妖精の元へと駆けてきた。

「見てコレ！」

頬を上気させたカナが左手を突き出す。

妖精は目を見張った。

一週間前誤って結んでしまったはずの赤い糸が、2人の小指にはなかったのだ。

「ほ、解けたのか？ 一体どうやって……？」

「それが僕達にもよくわからないんだ。特別な事はしてないんだけど、後夜祭の最中に気が付いた時にはもう糸がなくなっていて……」

「きつと妖精さんの強い想いが通じたのね」

不思議そうな顔で自分の左手を見つめる少年と、何ともメルヘンな想像に浸るカナ。そんな2人を眺め、妖精は涙ながらに思った。

——もう何でもいいからとにかく解けて良かった……！と。
そしてしばらく喜びを分かち合った後、カナと少年は教室を去っ
ていった。

嬉しそくに顔を見合わせ、にっこりと微笑みながら——。

「む」

今まで目をつむり黙り込んでいたオヤジが突然、短く声をあげた。

「ど、どうしたオヤジっ」

「何か思い出した！？」

俺と佐倉は思わず身を乗り出し、オヤジに詰め寄った。

オヤジは自分の記憶を確かめるかのように数回頷き、ゆっくりと口を開く。

「いや、大した事ではないのだが……1つ思い出した。その時の……系が解けた事を私に報告し終え、教室から去っていく時の2人が……」

「2人が？」

「ごくり、と喉が鳴る。」

「……とても、幸せそうだった」

「へ？」

何だそりゃ、と目を瞬かせる俺達に対し、オヤジは真剣な面持ちで語った。

「本当に満ち足りた笑顔だったんだ。系が解けた安堵感というよりも……2人とも心から、今の幸せを感じているような。上手くは説明できないが」

「今の幸せ……」

オヤジはさっき俺に言った。

私は30年以上前から妖精としてここにいるんだ。悲しみを感じている中学生の目くらいはすぐに気付けるよ、と。

昔からこの場所にいて多くの少年少女を見てきた彼だからこそ、きつとわかる事があるのだ——っん、多分。

「でもどうしてそんなに幸せそうだったんだろーな」

「さあ……」

佐倉が首を傾げる。

「何かあったのよ、きつと……」

「でもさ、正直、系が解けた事に直接関係あるとはあんまし思えないけどなグフオッ」

たった今俺の脇腹に強すぎる衝撃を与えた張本人は声をひそめ言った。

「ちょっと、せっかく妖精さんが思い出してくれたんだから、そん

な言い方失礼でしょ……。妖精さん、ありがとう！　きつとそれ、何かしらヒントになると思うわ。ね、藤原くん」

「……はい」

「……ああ腹が張り裂けるように痛い。」

「しかしやはり肝心の糸を解く方法に関しては何もわからないな……。2人とも本当にすまない」

「妖精さんが謝る事なんてないわよ。とにかく、まずはそのカナさんを捜すのが1番確実だと思う。もしかしたらまだこちら辺に住んでるかもって長岡さんのお母さんも言ってたし……」

その佐倉の言葉には、俺も大きく賛成だ。

「だな。やっぱここは地道に捜してくか」

「あ、ちょうど明日は土曜で学校ないわよ。うん。確か天気予報では週末は秋晴れ」

佐倉が『不敵な』としか説明できないような笑顔を見せた。

「絶好の人捜し日和、って感じ？」

第12話・・・『搜索開始』

生まれて初めて休日に女の子と出掛けるのが、まさか人捜しになるとは思わなかった。

その日は佐倉の言う通り（正確には天気予報士の言う通り、だが）清々しい秋晴れだった。

待ち合わせの9時ちょうど。……よりも30分遅れた9時半。約束の公園の時計台前で、佐倉亜美は仁王立ちしていた。

「ちよつと。藤原くん遅すぎ」

「す、すみません……」

俺は両手を合わせ、鬼の形相の佐倉に頭を下げた。

「言い訳聞いて下さい」

「手短に、10字以内でね」

「……寝坊しました」

ふー、と佐倉が深い溜め息を吐く。制服とは違う、白い上着にデニム生地のスカートを身につけた私服の佐倉は何だかいつもと違って見えた。

俺はというと、目を覚まし（この時すでに9時10分）慌ててそこらの服を掴んで着たため……お恥ずかしい事に日頃部屋着として大活躍中のよれよれジャージだ。佐倉が蔑んだ目で、俺を上から下まで見る。

「まあいいわ。こんな事でもたましてても時間がもったいないし。とりあえず行きましょう」

ああ情けない。

「ええと、まずどうする？ カナを捜すって言ってもさ、30年くらい前に俺達の学校の生徒だった色白美人って事しかヒントがない

んだぜ。まさかこの近所の家を一軒一軒聞いて回るわけにもいかないし」

それなんだけどねー、と再び溜め息を吐く佐倉。

「やっぱりとにかくコツコツといくしかないと思うのよね。ほら、名前がカナって事はわかってるんだから」

「……つまり、表札を一軒ずつ確かめて、カナとかカナコとかカナ工とか、カナってあだ名になりそうな人がいたらいちいちインターホンを押して話を聞く、みたいな」

「そーいうこと。それにね、30年前に中学生なんだから今は40代のおばさんでしょ。おばさん方のネットワークは馬鹿に出来ないんだからね、どつかのおばさんに話を聞いたら案外すぐにその『カナ』が見つかったちゃうかも！」

相変わらず呆れるほどの前向きさだが、これからの行動の地道加減にげんなりしていた今の俺にとってはありがたい限りだ。

そう。アホらしすぎるくらい前向きにならないと、こんな途方も無い事やっていられないんだ。

俺も半分やけくそ気味で頷く。

「だな、やっぱ足を使わなきゃな。人間は考えるアシって言うし！」

「うん、ベタベタな間違いありがと。そうね、人間足を使わなきゃね」

「……。じゃ、今日は1日地道に頑張りますか」

「ですね」

につこり笑った佐倉と俺は、『カナ』を捜すべく歩きだした。

最初に俺達のアンテナに引っ掛かったのは、公園から20分ほど歩いた所にある渡辺さんのお宅だ。

渋い和風で庭付き一戸建。その縦書きの表札には明朝体で『渡辺健司 加奈子』と書いてある。

「いくわよ」

佐倉が緊張した面持ちでインターホンを押した。

ドアを開けたのは、30年前に女子中学生だったとはとても思えない、つまり何というか――相当お年を召した老婦人。ごつごめんなさい間違えました、と慌てて謝った俺達をぎろりと睨み付け、渡辺加奈子さんは「近頃の若いモンときたら……」と言いつつぴしゃりとドアを閉めた。

しばらく立ち尽くす俺達。

「……まだ一軒目だし。こんなもんよね」

苦笑いを浮かべ佐倉が呟く。

「だな」

――が、しかし。

その後の地道な搜索活動にも関わらず、川上香菜子さんも清水加奈子さんも相田佳奈さんも吉村香苗さんも、30年前の力ナとは別人だった。

「カナって名前、結構多いのね……」

佐倉が疲れ切った声で言う。無理もない、もう5時間近く歩いたのだから。俺だってへとへとだ。

俺達は今、町内をぐるりと回り再びさっきの公園に戻ってきていた。

「結局何も情報なかったな……。まあそんな簡単に上手くいくとは思ってなかったけどさ」

広くはないが四季の自然が美しいこの公園の隅にあるベンチ。そこに腰掛けた俺は、溜め息を吐いた。

頭上一面には綺麗な紅葉が広がり、秋風に揺れている。

「同じ色……」

独り言のような言葉と共に、佐倉が小指の糸を引っ張った。

確かに、赤い糸と秋の葉は似たような色をしていた。どこまでも鮮やかな、深紅。

俺は自分の小指から伸びるその糸を黙って眺めた。

「……」

留守の家や表札に名字しか書いていない家もあったが、一通り町内の『カナ』候補の皆様の自宅は訪ね終わった。にも関わらず、まだ30年前の事についてのヒントは0。

問題は、これからだ。

「とりあえず、もう少し搜索範囲を広げてみるか。駅前の方とか、隣町にも行ってみよーぜ」

「うん」

「って言うかさ、ほら、長岡母がこの近所でカナらしき人を目撃したのつてもう10年も前だろ？ だからいくらここら辺を丁寧に捜したからって、何の意味もない事もあるわけで……」

佐倉が訝しげに眉をひそめる。

「何が言いたいのか？」

「いや、だからつまり、ダメ元つつーか、あんましガツツリ結果手に入れようとか思わない方が絶対いいと思うんだ。気楽に、こう散歩ついでに人捜ししてるよーな感じで」

ぷつ、と佐倉が可笑しそうに吹き出した。

「散歩ついでに……って言うてる事めちやくちや。でも、まあ確かに藤原くんの言う通りよね」

背中にばしつと軽い（いや、ちょーつと重めの？）衝撃。何の事はない、佐倉の手の平がヒットしたのだ。

「良いこと言うわね、たまには」

たまにはが余計だ。

そして俺達は駅へ向かう事にした。――の、だが。

この行動こそが今日の予定を大きく狂わす元凶になるとは、その時の俺は知る由もなかった。

第13話・・・『王子、再び』

数年前に大規模な改装工事が行われた駅前広場は、ベンチや噴水、ちよつとした銅像なんかが置いてあり、この辺で一番の待ち合わせスポットだ。

月末の土曜日ということで、今日は一段と多くの人で賑わっている。

家族、友人、恋人……と、隣にいる人々の関係性はパツと見さまざまだが、皆一様に楽しそうな顔をしている。

しかし、そこに着いた瞬間、俺の隣の佐倉は絶望的な声をあげた。
「……藤原くん、あれ見て」

彼女の目線の先を追うと、そこには駅前の広場をうろつく同じクラスの男子3人がいた。

文化祭前で部活動もなく暇を持て余すビューティフルサタデー、おそらく町のメインストリートに遊びに来たのだろう。

俺も全身の血の気が引く。

ただでさえ先日の「お呼びだし事件」で、不本意すぎる両思い疑惑がかけられた俺たちだ。このタイミングで、休日に2人並んで歩いているところを見られたら……きっと疑惑は確信に変わり、冷やかしの嵐が襲ってくるだろう。

しかも更に運の悪いことに、あの3人はクラスでも特にお喋りな部類に入る奴らだ。見つければクラス内はもちろん、下手したら学年中に間違った噂が広まりかねない。

「……ねえ、こっち来るわよ。やばいんじゃないの？」

佐倉が俺の袖を引っ張った。

3人組は何やら談笑しながら、俺たちのほうに向かってくる。
まだ気づく様子はないが、その距離はもう十数メートル。見つか

るのも時間の問題だ。

「とりあえず逃げよう……！」

俺たちは一目散に走り出した。

——絶対に目撃されるわけにはいかない——。

その強い思いから、ただひたすらに足を動かした。

馬鹿みたいだと思われるかもしれない。

しかし、考えてもみてほしい。

中学生の生活というのは、学校と家の往復ばかり。いわば俺たちの「世界」は学校が八割だ。

そして14歳というやつは、人の色恋沙汰が好物なのだ。誰も彼もが、いつも他人のちよつとした動きを嗅ぎだそうと、鼻をひくひく動かしている。

つまり中学生がクラスで不本意なカップル認定されるとするのは、社会人に例えるなら——痴漢冤罪で捕まって釈放されたけど周りの目は超痛い、ああ世の中って無情だぜ、みたいな感じだろうか（……ちよつと違うかもしれない）。

なるべく人目につかない裏道ばかり選んで走り続けていたら、普段ほとんど来ないような町の外れまで来ていた。

そろそろ止まっても大丈夫かもしれない。だいぶ駅からは離れたし、何より息が切れて苦しくなってきた。

「ちよ、ちよつと……タイム」

と、隣を走っていた佐倉が急激にスピードを緩める。そしてへろへろとへたり込んでしまった。

「佐倉！？ だ、大丈夫かよ！？」

「うう、頭がぐわんぐわんするの……貧血かも」

「貧血！？」

予想外の出来事に、俺は軽いパニックだった。

「とりあえずどこか……近くの座れるところ行って、座ろう！ ていうか、立てるか？ 飲み物買ってくる？」

「ううん、大丈夫……。ちょっとここでしゃがんでれば治ると思うから……」

「でも……」

隣にしゃがんで見る佐倉の顔色は明らかに青白かった。本当に具合が悪そうだ。

とりあえず遠慮がちに背中をさすってみるが、よく考えれば彼女は別に吐き気は訴えていないのだ。なので、この行動に意味があるとはちよつと言い難い。

対処法がわからない自分が死ぬほど不甲斐なかった。

こんなときどうするのが最善なんだろう。

「あれ、佐倉さん……と藤原くん？」

聞き覚えのある凜とした声が頭上から降ってきた。

顔を上げると、そこには佐倉の想い人「高梨クン」がいた。彼は若草色の爽やかなシャツにジーンズという私服で、手に持ったリードには真っ白な中型犬が繋がれていた。

「えっ！ 高梨くん？」

高梨の姿を認めた佐倉の頬に、少しだけ血の気が戻る。それでも

やっぱり普段よりだいぶ青白い。

「どうしたの？」

道端にへたりこむ佐倉を見て、高梨が俺に尋ねた。とても真剣な表情をしている。

「実は佐倉が貧血起こしちゃって……」

それを聞いた高梨は、俺に向かって小さく頷いた。

そして佐倉の肩に優しく手をかける。

「佐倉さん。僕の家、ここからすぐなんだ。歩いて1分もかからない」

「そうなの？」

「うん。だから僕の家で休みなよ。飲み物も出せるし横になれるし、ここで座ってるより断然楽になると思う」

高梨の口調は頼もしかった。

ポツ、と佐倉の頬がまた一段階、血色を帯びた。

普段、佐倉が彼のことを王子呼ばわりするのを、俺は正直、小馬鹿にしている。

ぬわーにが白馬に乗った王子様だ、ただのもやしっ子じゃねえか。タカナシクンだって人の子、ゲップもすれば鼻くそもほじるんだよ、夢見てんじゃねえよアホか、と。

しかし、そのときの自分を、俺は今心の底からぶん殴ってやりたいと思う。

なぜなら、本当に情けないことだけど——このとき俺にも、高梨が本物の白馬の王子様のようにキラキラ輝いて見えていたのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0203a/>

シアワセの赤い糸

2011年6月15日07時10分発行